目　次

2006年11月
第149号

提言　～今、学校に求められるもの～

「教育に夢を」　県教育センター次長　原田　宏明……　1

特集　～教育センターは　今～

「キャリア教育への理解を深める」
教科外教育チーム……　4

講座紹介

「小学校道徳教育実践講座」　……10
「外部講師の講演から」　……11

連載

学校組織活性化のための『実践プログラム』
「『学校経営・運営ビジョン』の改訂に向けて」
学校評価研究チーム……12

授業改善
「分かる授業を目指した導入、発問の工夫」　カリキュラム開発研究チーム……14

教員ネットワーク
「ネットワークによる教員の交流・協働　～一人一人の授業力向上を目指して～」
情報化推進研究チーム……16

情報教育講座
「『福島県の情報教育の実態等に関する調査』結果報告」　情報教育チーム……18

組織マネジメントの発想を生かす
「SWOT分析で各校の重点事項を創る　～ミッションに基づいた重点事項を～」
教科外教育チーム……20

実践　学校教育相談
「自傷行為を繰り返す生徒への対応　～教師にできること～」
教育相談チーム……22

授業に生きる資料
「地域素材の教材化　～地名からさぐる地域の姿」　教科教育チーム……26

教育実践

平成17年度長期研究員の研究から
「英語リスニング意欲を高める英語リスニング指導の工夫
～ Authentic な教材と予測を生かした活動の観点から～」
二本松市立二本松第二中学校　教諭　菊地　一彦　……28
「学校を変える学校情報化からのアプローチ
～一人一人がかかわることができるスクログ（学校用CMS）の活用を通して～」
郡山市立明健小学校　教諭　角田　雅仁　……32

カリキュラムセンターだより

「研修による指導力の向上に向けて」　……36

おしらせ

「平成18年度福島県教育研究発表大会」
「実践に役立つ教育資料」　……37

＜表紙デザイン：福島県教育センター教科教育チーム　片平　　仁＞

提言

「教育に夢を」

県教育センター次長
原　田　宏　明

1 “SUSTAINABLE”

テレビでニュースを見ていると、気が重くなってきて、思うのである。一体、日本に為（な）せることはないのか、学校教育ができることはないのか、と。そして次に決まって頭に浮かんでくるのは、「持続可能な」という言葉である。

いかにも翻訳調のこの言い回しに出合ったのは、今から四年ほど前のことだった。私は教育テレビで、経済の話を聞いていた。経済の番組であるはずなのに、コメンテーターである識者は、地球環境がいかに危機的な状況にあるか、そして、資源の限界も見えてきた現在、その状況を打開するには「発展する社会」ではなく「持続可能な社会」を目指すべきである、しかし、日本社会はそのことに気付いていない、などということを静かに、しかし延々と解説した。その番組を見終わったとき、私は恐ろしさとわずかばかりの救いと我が身の無知とで、しばし呆然としていた。

そのとき以来、ある種のニュースに接すると、まるで条件反射のごとく冒頭のような反応が起こるようになった。私の気持ちを確実に暗くさせるニュースはいくつかあるが、その筆頭は、広い意味で環境問題を報じるものである。何を大袈裟な、と感じる方は四年前の私と同じかもしれない。

アメリカのニューオリンズの大洪水や日本各地で頻発する水害あるいは豪雪、それにヨーロッパなどの酷暑の様子をテレビで目にすると、そのあまりのひどさに、「天地創造」を想ってしまう。つい先日は、こんな話も聞いた。アイスランドとグリーンランド旅行から帰ってきたばかりの知人だが、彼が現地で氷山の美しさに感嘆していると、氷河も氷山も二、三十年前と比べると、信じがたいほど小さくなっているのですよ、と聞かされたという。

これらは地球温暖化と関係があると指摘する専門家も増えてきた。もし、そうならば、だまって手をこまぬいていていいものだろうか。積極的な手を打たなければ、二、三十年後には環境破壊や地球温暖化は確実に進んでいて、たとえ物質的にどんなに豊かになっていたとしても、我々は今よりもっとひどい自然災害に苦しんでいることになるのではないか。

2　学校でできること

では、我々は一体何をすべきなのだろうか。まず、地球はもはや無限の資源やエネルギーを持った場所ではないということを常に意識して暮らす必要があろう。しかし、そんなことは非現実的だし、第一、大昔の生き方などできない。そう反論したい方も以前の私と同

じかもしれない。

先に紹介したテレビ番組で、地球に優しく、しかし同時に快適で幸せな生き方を国家的広がりをもって実験し、実践している場所があることを私は知ったのである。

ノルウェイでは、国の経済の仕組みだけではなく、個人の生き方も含めて、「持続可能な社会」を様々な形で模索しているという。先のテレビでは、細かな解説を付けながら、ノルウェイ社会の色々なシーンを見せてくれた。しかし、私にとって最も印象的だったのは、「持続可能な社会」を達成するポイントは発想の転換であるという指摘だった。つまり、何が幸福なのかという価値観の転換だというのである。自分の必要・不必要にかかわらず、とにかく多くのものを製造･販売して、多くの利益を得る。それが豊かで幸せな生き方だという考えは、果たして21世紀の現在、正しいのだろうかと疑えるかどうか。なぜならば、そういう発想が結局は地球温暖化などを促進し、環境までも破壊しているということが分かってきたのだから、というのである。

では、一体、何をすべきなのか。答えは、そう簡単ではない。だからこそ、ここからが日本社会の、そして学校教育の出番だと思うのである。日本には優れた科学技術がある。これからはその技術を持続可能な世界や社会づくりのために活かすべきではないか。そして、学校では「持続可能な社会」についての教育を始めるべきではないか、と私は思うのである。「持続可能な社会」は、地球温暖化などを防ぐ様々な科学技術や知恵を必要とするし、そのための考え方や生き方にかかわる教育をできるだけ多くの人間に施すことを必要とする。

学校では既に環境教育を始めてはいるが、それを更に推し進め、我々の日常生活の中で、どんな活動や工夫をすべきかも教育していくべきではないかと思う。アメリカでは知的な人々を中心に、ロハス（LOHAS：Lifestyles Of Health And Sustainability）の実践者が増えているという。それは持続可能な社会をつくるための、最もわかりやすく、実践しやすい生き方の一つかもしれない。その詳細については、ここでは触れないが、残念なことに、我が国ではその趣旨が必ずしも理解されず、むしろファッション的に扱われているきらいがある。何も、ロハスそのものである必要はない。要は、これ以上地球環境に負荷をかけない生き方の実践を学校教育で扱い始めるべきではないかということである。

話が飛んで恐縮だが、先のテレビ番組に出合った一年後、ノンフィクション作家の山根一眞氏に当時の勤務校で講演をしていただいたことがある。「人類滅亡と21世紀の仕事」という演題を掲げて山根氏が語ったことは、実は先のテレビ番組とダブっている部分もあった。山根氏はNASAで手に入れたという資料や貴重なスライドをふんだんに使って、地球がいかに汚染され、破壊されているかを我々に示してくれた。特に地球の酸素の多くを生み出しているアマゾン川流域の森林破壊のすさまじさは圧倒的だった。講演の中で山根氏が何度も我々に訴えたのは、我々が今、地球を救う活動を始めなければ、地球はもう元には戻らなくなってしまうということ、そして、身の回りでできる活動から始めることの大切さだった。

地球環境に負荷をかけない様々な試みを実

践している山根氏と幸運にも二人だけで三十分ほど話す時間を持つことができたので、私は思いきって自分のささやかな実践を話してみた。私はレジ袋が毎日大量に消費されている現状に疑問を持ち、スーパーに買い物に行くときには必ず自分の買い物袋をもっていくようにしていると話した。すると山根氏は、御自宅のある東京都杉並区で広がっているという、ぜん息のような奇妙な病気の話をしてくれた。それは、もしかすると杉並区のゴミ処分場で毎日処理されている何十万枚ものレジ袋が出すガスのせいではないか、もし杉並区の人たちがレジ袋を辞退するという暮らし方をするならば、あるいはその病気はなくなるのではないか、という話もしてくれた。

環境汚染や地球温暖化という大きな問題は、あまりにも大きすぎて自分の手に負える問題ではないと考えがちである。しかし、上に述べたようなささやかなことでも、それが何百万人、何千万人という規模の行動になれば、地球環境をも変える力となるに違いないし、そういうことを計画的に広めることができるのは学校教育だけではないかと思うのである。

3　教育に夢を

二年前の夏、久し振りに岩手を巡ってきた。目的の一つは宮沢賢治ゆかりの地をいくつか訪ねることだった。三十数年来の賢治ファンである私も、「イギリス海岸」を訪れるのは今回が初めてだった。高鳴る気持ちを抑えきれず、小走りに憧れの地に足を進めてみると、目にとびこんできたのは、ただのいなかの風景だった。

いささかがっかりして、とうとうと流れる北上川のほとりを歩きながら、賢治の生きていた時代を想ってみた。すると次第に、百年前には今よりももっと寂しい、ただのいなかだったに違いない風景の中にイーハトーブという理想郷を見た賢治の熱い思いが、かえって強く感じられてきた。

「世界が幸せとならない限り、個人の幸せはない」と言った賢治は、あまりにも理想主義的な生き方のために健康を害し、道半ばで早世してしまった。一方、ほぼ同時代を生きた野口英世は、賢治のような言葉を残してはいないが、県も国も人種も超えて、文字どおり世界の幸せのために病気を撲滅しようとした。二人とも志半ばにして亡くなってしまったものの、理想に燃えた彼らの生き方は今もって日本人に大きな影響を及ぼしている。

さて、話を現実に引き戻せば、今、学校は例外なく学力向上に心を砕いている。が、向上させたその学力で、一体、何をさせようとしているのだろう。それは果たして自己実現という個人の目的のために使われるだけでいいのだろうか。もっと大きな志については語られているのだろうか。

賢治や英世の時代から百年ほどが経ち、どこへでも簡単に出かけられるほど世界は小さくなり、そして地球の深刻な状況もこれほど見えてきたというのに、「世界のために」などという言葉は学校現場から聞こえてこないように思う。それとも、今、そんなことを言ったなら、あまりにも理想主義的と一笑されてしまうのだろうか。

教科外教育チーム

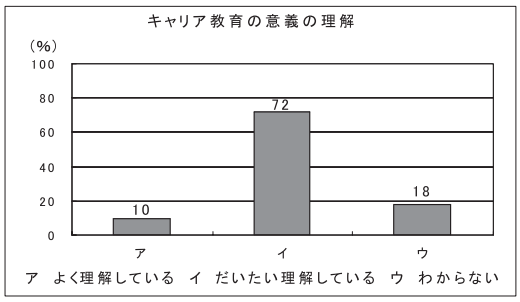
キャリア教育への理解を深める

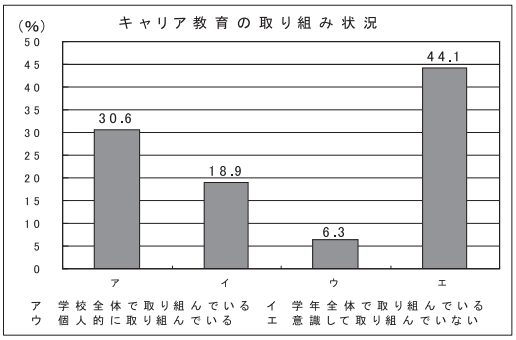
はじめに

環境教育、性教育などから数えて何番目にあたるのか、平成11年12月の中央教育審議会答申で「キャリア教育」が登場してから７年が経過しようとしています。

様々な社会問題が生じるたびに、その対応が「○○教育」という形で学校教育に求められます。しかし「えっ、またか、よく分からないよ、何をすればいいの、そんな時間ないよ」というのが正直なところではないでしょうか。

先日、当センター開催の生徒指導・特別活動担当者研修会に参加された県立学校の先生方111名を対象に、「キャリア教育の意義の理解」、「キャリア教育についての取り組み」に関して質問したところ下図の結果が得られました。



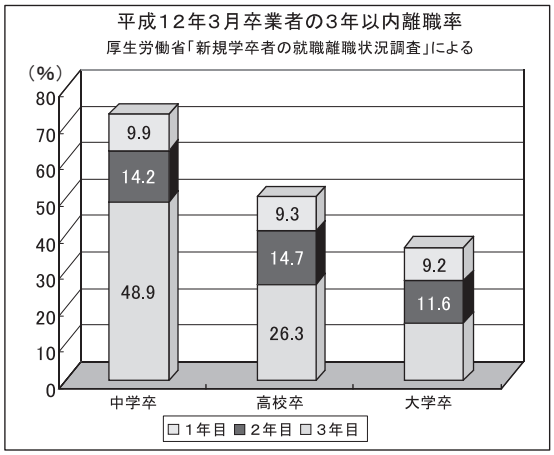


これから本格的な教育課程の編成時期を迎えるに当たり、本稿を通して少しでもキャリア教育について理解を深めていただき、実践へのお手伝いができれば幸いです。

１ 「なぜ？なに？」キャリア教育理解講座

(1) グラフが語りかけるもの

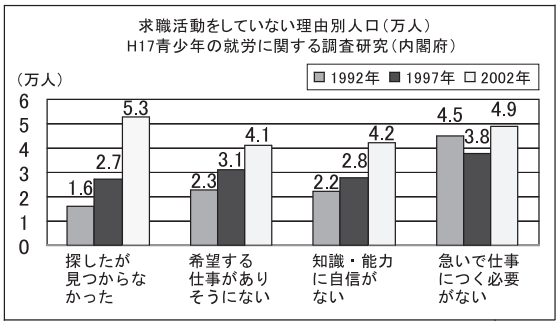
読者の方々は下のグラフをご覧になって、どう感じられますか。



このグラフは、せっかく就職した働き先を３年以内に辞めてしまった人数の割合を表しています。「えっ、こんなに？」というのが実感ではないでしょうか。いわゆる「七五三現象」と言われるものであり、中卒の７割、高卒の５割、大卒の３割が３年以内に働き先を辞めてしまうという実態が明らかになっています。しかも、それぞれの約半数近くが１年以内に辞めているのです。

教師としては、就職先の開拓に奔走し試験対策や面接練習に励み、やっとのことで就職が決定して喜んだのもつかの間、教え子があっという間に離職してしまうという現実は、非常に残念なことです。

次のグラフは、無業者(いわゆるニート)の中でも非求職型（就職希望はあるが、就職活動をしていない）の理由別人口を表しています。



これら二つのグラフを見ると、「働く」ということとの関係で自然と次のような疑問がわいてくるのではないでしょうか。

○どうしてすぐに辞めてしまうのだろうか？
○「働かなくちゃ」という気があるのだろうか？
○学校教育にどこか問題があるのだろうか？
○学校教育としてなすべきことは何だろうか？

さて、学校として、また、教師としてこの問題にどう対処していくべきでしょうか。職場体験の回数や日数を増やすことで対処していくのでしょうか。ただ、対処療法的な対応では本当の解決に至らないことは、既に指摘されているところです。

⑵ 「働く」の視点で教育の目的を振り返る

そこで、原点に立ち返り「働く」という視点で「教育の目的」を見てみましょう。

第１条（教育の目的）　教育は人格の完成をめざし、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。　［教育基本法］

今まで学校は、上記の条文に基づき「知･徳･体」を教育目標に掲げ、児童生徒の知的発達、情緒的発達、身体的発達に努力してきました。しかし、下線部の「勤労と責任」についてはいかがでしょうか。昨年２月の当センター開催のキャリア教育に関する講演会で、筑波大学の渡辺三枝子教授は次のように述べておられます。

全人的発達の一側面として、「働くこと」との関連において個々人に発達課題があり、ほかの発達課題と同様に、発達段階を追って、自己と働くこととの関係は発達していきます。これが「キャリア発達」の考え方であり、学校教育において小さい頃から促すべきなのです。

よく、人間は考える動物、社会的な動物と言われます。それと同時に人間はこの社会をつくっている「働く動物」でもあり、成長に伴って働くことの重要性は増していきます。しかし、今までの学校教育を振り返ると、人間が生きていく上で重要な意味を持つ「働くこと」の意味の理解や価値観の形成、働いていくための能力や態度（これがキャリアの意味）の育成が弱かったのではないでしょうか。

どの児童生徒も時間差こそあれ、やがては社会人として巣立っていきます。そして、ある日突然、学ぶ立場から働く立場に変わるわけであり、学ぶ立場にあるときに働くことについて学んだり必要な力をつけたりしていかなければ、戸惑うのも当然かもしれません。ですから、今、学校に求められているのは、「働くこと」との関連において、児童生徒に「本番の社会で生きていける力」を付けさせていくことであると言えるでしょう。

講演の中で、渡辺三枝子教授はキャリア教育の意味について次のように述べられました。

報告書によると「キャリア教育とは、一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、従来の教育のあり方を見直し、改革していくための理念と方向性を示すもの」とあります。特別な教育活動を意味する概念ではなく、教育活動を見直す視点なのです。言い換えれば、キャリア発達の視点に立って、日頃の全教育活動（教科活動、特別活動、道徳の時間など）を見直すところから出発することがキャリア教育なのです。

２ 「情報を得る！」キャリア教育への準備講座

まず、実践に先立って必要なことは、児童生徒が巣立っていく実社会に、教師自身が「働く」という視点で目を向け、情報を得ておくことではないでしょうか。実は、この姿勢で日々の教

育活動に当たっていくことがキャリア教育の第一歩なのです。

「学校と社会が疎遠である」と言われ､「接続」の大切さが強調されていますが、教師が社会に目を向けていくことで距離が縮まることは容易に予想することができます。

⑴　情報その１

～接続に関わるハローワーク福島を訪問～

ひっきりなしに職を探す人が訪れ、20台のパソコンはすぐにいっぱいになる状況です。上席職業指導官の方から、下記の内容のお話を伺うことができました。

①最近の就職動向
○地区によって異なるが、求人数は依然厳しい。
○高校卒業時、大学卒業時が就職の最大のチャンス。
②最近の就職希望者を見て
○仕事が合わないという簡単な理由で辞めてしまう。
（原因）・現代では働かなくても困らない状況にある。
・保護者の過保護傾向
○「働くとは？、仕事とは？」を理解していない。
（原因）・昔は家庭、地域が教えていたが、教育力が低下。
・手伝いも減り、「働くこと」への意識が低下。
・「仕事」へのとらえが狭く､「仕事＝職業」という意識が生徒、保護者ともに強い。
③企業の求める人材とは
○人物重視である。
○量よりも質の時代である（求人を出しても該当する人材がいなければ採用しない。)。
④学校教育に求めること
○将来生きていく上での必要性を理解して教科学習を。
○面接を見ていると、内容が同じでマニュアル化されている。これは「職業とは」「働くとは」ということに対して考えてこなかったこと、自己理解が不十分であることの現れである。
○就職間際になって、職業について考えたり、面接の準備を始めたりするのではなく、小さい頃から「あいさつ」､「コミュニケーション」の訓練が必要である。
○人生の最も重要な場面を迎えるに当たっての準備があまりに不足している。
○相手のことを分かろうとする努力が必要である。

この中には、キャリア教育を進めていく上での重要な情報が数多く含まれていると思います。

⑵　情報その２

～今、社会から求められている力を知る～

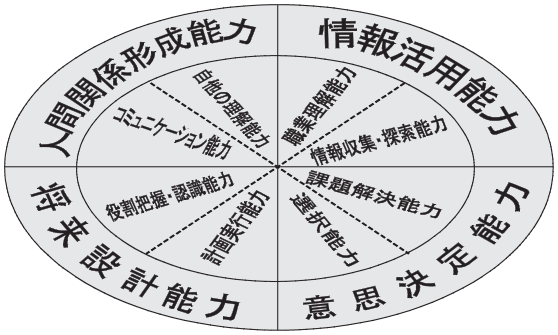
ある新聞の見出しが目に止まりました。

①押しの強さより穏やかな聞き上手
②チームで考え、成功体験を共有
③商品に自信が持てる知識武装を
平成１８年１０月１３日　日経ＭＪより

これはある飲料宅配販売メーカーが、時代の変化に対応して、訪問販売員に徹底していることだそうです。目の前の児童生徒も働き始めたら、このようなことが要求される中で生きていくことになります。読者のみなさんは、この３項目からどのような力が必要とされるとお考えですか。単純に考えただけでも、①にはコミュニケーション能力､②には人間関係をつくる力、問題解決能力、③には科学的な知識･理解能力、情報活用能力がそれぞれ必要とされていることがうかがえるのではないでしょうか。

これまでの進路指導は、どうしても出口に重きが置かれ、本人の適性と職業の特性との合致点を見つけることに力を注ぐマッチング理論でした。しかし、これだけ変化が激しい社会になると、求められる能力も変化しマッチング理論では対応しきれず、おのずと小さい頃からキャリアを積んでいく、キャリア形成の考え方が必要になってくることがお分かりいただけるでしょう。

キャリア教育の推進に当たって、国立教育政策研究所生徒指導研究センターから、キャリア発達における次の四つの能力が示されました。



これから、この四つの能力はどんどん注目され、様々な新しい取組みがなされることが予想されます。しかし大切なことは、「四つの能力をはぐくむためには？」ではなく、「四つの能力は日々の教育活動のどの部分ではぐくめるだろう？」という発想なのではないでしょうか。

⑶　**情報その３**

職場体験時は教師にとって宝の山

～外に目を向けながらも、足下を見つめる～

今回、福島市立吾妻中学校の協力で、五日間にわたる職場体験期間中にいくつかの事業所を訪問させていただく貴重な機会を得ました。その中で、ある美容室の店長さんが生徒へ指導する傍ら次のようなことをおっしゃいました。

先生、おれも長年、弟子を育てる中で、色々な弟子を見てきたけど、やっぱり学校は大事だよ。なんと言っても小さいときから色々な人と交わり、人間関係を学べるのは学校しかないんだよ。弟子も当然一人で大きくなれるわけではなくて、この美容室の中のいろんな人に助けられ、一人前になっていくんだよ。うちは客商売だから、特にあいさつや身だしなみ、掃除が大切なんだけど、それも学校で集団の中で学ぶでしょ。

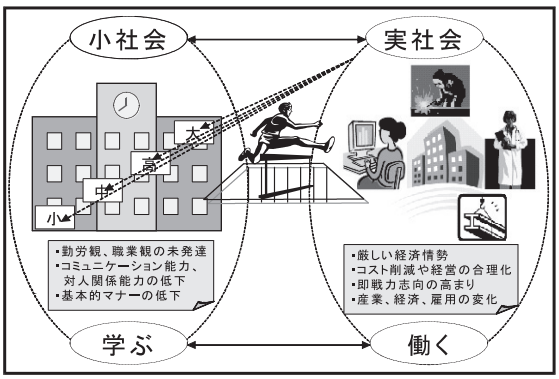
それから勉強も大事だ。特に数学は、物事を順序立てて考える力なんかでは、おれはすごく大切だと思うんだ。技術・家庭科ではものを作ると思うんだけど手先を鍛えるだけでなく、ちゃんと設計して、計画を立てそのとおりに仕事を進めていく点で重要だね。それからうちの仕事はやっぱり感性なんだよ。弟子を見ていてもやっぱり差が出るね。だから学校での感性を磨く音楽、美術の時間はこの仕事で最も大事だし、どんどんやってもらいたいね。

この話を聞くと、日々の教科指導、道徳、特別活動等、我々の足下の教育活動が、「働く」ということに密接につながっており、いかに学校教育が重要であるかが理解できるのではないでしょうか。

３　「やれるところから！」キャリア教育実践講座

⑴　まずは「社会への接続」を意識するところから

そもそも、キャリア教育が求められる背景には「学校と社会との接続」の改善がありました。下図をご覧ください。



かつての終身雇用時代は、「学校は学ぶことが専門、後は、学校で学んだことを基に会社が育ててくれるから頑張るんだよ。」ということでも通用したとよく言われます。しかし、現代は受け入れ側の社会が複雑化しています。それに加えて、社会へ入っていこうとしている児童生徒の様々な能力の低下が叫ばれています。ですから上図の両者の溝は深まるばかりです。

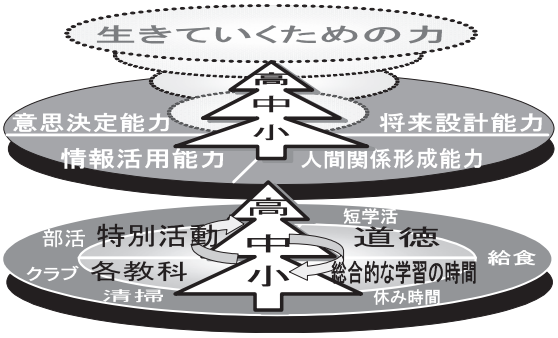
今までの一般的傾向として、学校が社会との接続を意識するのは、主に高等学校の就職指導においてだったのではないでしょうか。これからは、小・中・高のどの校種とも、常に目の前の児童・生徒が社会に羽ばたこうとするその瞬間をイメージし、互いに手を携えながら、教育活動に当たっていくことが望まれます。

⑵　キャリア発達の視点から教育活動を見直す

この視点で、現在の学校教育を見直してみることは非常に意義があると言えるのではないでしょうか。その理由を次の図を基に説明すると、教師が日々の一つ一つの教育活動の意味を「働く、キャリア発達」の視点から自らに問いかけ考えることで、しっかりとした意味付けがなされ、自信を持って指導することができるようになると予想されるからです。

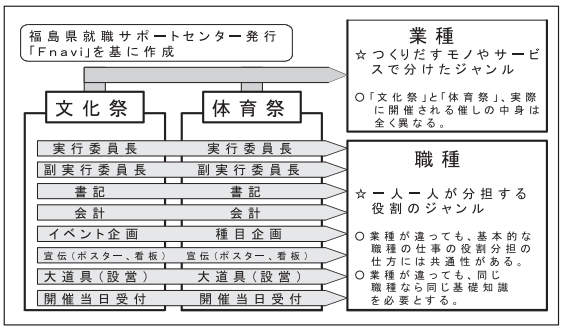
つまり、様々な教育活動が将来の「生きて働

いていくための力」の育成に統合されていくことになるのです。ただし、注意を要するのは、この「働くこと」の意味、そして「キャリアを発達させる意味･目的」を「職業」に限定せず、広くとらえておく必要があるということです。



(3) 特別活動を最大限に生かす

学校は「学びの場」ですが､同時に「働く場」でもあります。その代表例を挙げるとすれば、日々の清掃活動や給食当番、係活動、委員会活動、そして学校行事に向けての準備活動など、主に特別活動の領域です。特別活動は､「為すことによって学ぶ活動」であり、働くことを実体験を通して学んでいると言えるのではないでしょうか。現に、福島県就職サポートセンター発刊の「Fnavi」（やりたいこと・向いているシゴトを探す本）には、仕事のバリエーションを知るために、次のような例えがなされています。

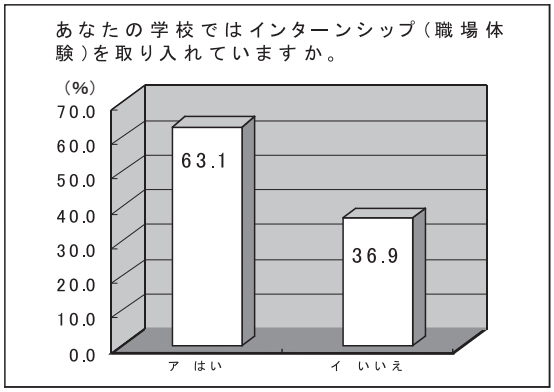


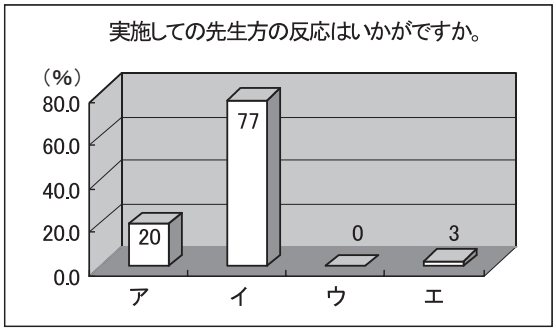
このようにとらえると、児童生徒は学校行事の運営を通して、学校内にいながら様々な業種や職種を経験していることになります。

キャリア教育の素材は至る所に転がっており､それをどうキャリア発達と結び付けるかで、児童生徒にとって単にこなすだけで何も残らないうちに終わるか、血となり肉となってキャリア形成につながるか、大きく変わってくるのです。

(4) 職場体験を生かす

職場体験が実施されるようになってから10年以上が経過し、今では、多くの中学校で実施されています。下図は県立学校教諭111名対象のアンケートの結果です。





ア　意義が大きく、準備等の苦労も気にならない
イ　意義は大きいが、事前事後の労力が大変大きい
ウ　大変さだけが残り、やる意義は感じられない
エ　準備等を考えると他にエネルギーを注ぐべき

県立学校においても、職場体験を取り入れる学校が約６割と増えてきており、取り組んでみての意義の大きさを実感されている先生がほとんどであることが分かります。しかし、従来から問題点として指摘されているのは、事前の準備に多くの時間がかかることや事後指導が不十分で、ややもすると、職場体験を通して学ぶこ

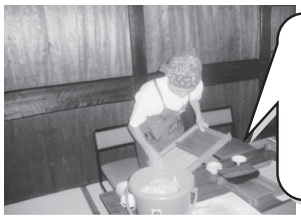
とよりも職場体験を実施することが目的となってしまいがちだということです。

そのような中、福島市は５年前から市内の全中学校が５日間の職場体験に取り組んでおり、今年で６年目となります。市教育委員会のリーダーシップの下、スムーズに事前の準備がなされていました。学年主任の仲原先生に、「５日間行うための準備は大変ではないですか。」と質問したところ、「１日やるのも５日やるのも事前の準備は同じなんです。」とおっしゃり、「なるほど。」と思いました。

次に実際の体験風景です。

動物が好きでこの職場を選んだが、体力が必要であることや、商品を扱うことの大変さを実感している。

消防署で命綱の結び方を練習している。訓練の最中は常に大きな声でアピールすることが求められる。



食堂で、団体旅行客が食べ終わった後の片付けを行っている。夕方には次の団体が入る予定で、次の仕事が待っている。

大福饅頭が次々に機械から流れ出てくる。立ったままでの作業がひたすら続く。

さすがに５日間の職場体験は生徒達に大きな影響を与えたようです。ほとんどの事業所の方が「だいたい３日過ぎるとみんな変わってくるね。」とおっしゃいます。生徒達の様子を見たり話を聞いたりする中で、大切だと思うことは、あいさつがきちんとできること、掃除がきちんとできること、大きな声で返事ができることです。いずれも我々教師が口うるさく学校で言っていることですが、生徒達は「働くこと」を通して実感していたようです。

職場体験により、すぐに、勤労観・職業観、そして前述の四つの能力が身に付くとは思えません。しかし、学校を一歩抜け出し、社会に足を踏み入れ、体験を通して「働く」ことについて考えることで、生徒は普段の学校生活に意味を持たせ、社会を別の角度から見つめることができるのではないでしょうか。

おわりに

今回、「キャリア教育への理解を深める」ということを目標に述べてきましたが、いかがでしたでしょうか。キャリア教育はあくまで理念・概念であるため、理解しにくい面もあったかとは思いますが、あくまで「働く」という観点を持ちながら学校教育全体を見直していくということで、特別、新しいことを始めることではないこともお分かりいただけたと思います。

未来を担う目の前の児童生徒の「生きてはたらく力の育成」を目指して、キャリア教育に取り組んでいきましょう。まずは、教師自身が社会に目を向けるところから！

参考文献

・『入門進路指導・相談』（福村出版）
・『キャリア教育が高校を変える』（学事出版）
・『中学生の進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン』（実業之日本社）

講座紹介

小学校道徳教育実践講座

9月20日（水）～21日（木）

道徳の時間の学習理論及び効果的な指導法について研修を行い、指導力を高めるための講座です。

協　議「道徳教育指導上の諸問題」

グループでの協議を通して、指導上の諸問題や課題を明確にしました。

＜受講者の声＞

KJ 法を使い、島取りなどの作業をする中で課題改善に向けての方向性を見いだす等、情報交換をすることができ、非常に良かった。

実践報告「道徳の時間における授業の実践報告 」

伊達市立富野小学校、斎藤恵美教諭から研究及び実践報告を伺い、今後の道徳教育実践への手がかりや改善へのヒント・方法論等を学びました。

＜受講者の声＞

道徳の時間だけでなく他教科とのかかわりを考慮し、有効にゲストティーチャーを活用されている様子や方法をお話しいただき、自分の学校でも取り組んでみたいと思った。

講　義「道徳の時間の工夫」

学習指導要領の取扱いや留意点及び道徳の時間の工夫について学びました。

＜受講者の声＞

基礎・基本となる事項を改めて確認することができた。また、一番疑問に感じていた評価についても理解を深めることができた。今後の実践に向けての意欲が高まった。

講　話「豊かな心を育てる道徳教育」

文部科学省、永田繁雄教育課程調査官から道徳教育の本質と今日的課題、改善策等についてお話をいただきました。

＜受講者の声＞

先生のお話に最後まで引き込まれてしまいました。うなずくことばかりで現代の子どもの実態など改めて再認識させられ、何ができ、何をしていかなければならないのか、真剣に前向きに考えていきたいと思った。

演習・協議「道徳の資料分析と授業構想作成」

選択した資料について分析を行い、それを基に各自が授業構想を作成し、グループ協議を行いました。

＜受講者の声＞

一人では、なかなか考えが及ばないことも、数名で行ったブレーンストーミングにより、たくさんの意見が交わされ、指導案づくりも深く考えることができ、とても楽しかった。

外部講師の講演から

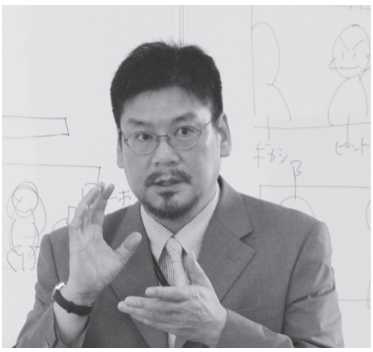
教育センターでは、多くの外部講師をお招きしています。
今回は、これまでに行われた講座から４名の先生方をご紹介します。
外部講師の講演は、聴講ができます。所定の用紙で１週間前までに申し込んでください。詳しくは、Webページをご覧下さい。

ディジタル映像編集講座　　７月25日㈫

「動画作品の制作」

ディジタルメディアクリエーター　**澤田　正人** 氏

撮影意図にあったシーンの撮影方法、絵コンテやストーリー設定などについて学び、各自、シナリオを作成。撮影や編集を行い、作品について助言をいただきました。



学校教育相談運営講座　　８月17日㈭

「学校教育相談への期待」

筑波大学大学院人間総合科学研究科教授　**石隈　利紀** 氏

学校心理学の視点から、苦戦している子どもの「学習面」「心理・社会面」「進路面」「健康面」への校内外でのチーム援助の在り方（チームの立ち上げから援助の具体的な方法まで）についてお話をいただきました。

高等学校経験者研修Ⅱ（家庭）　　８月22日㈫

「今、家庭科の教師に求められること」
～家庭科教育の課題と展望～

聖徳大学教授　**河野　公子** 氏

社会から要請されている家庭科の課題について、健康増進と食育推進、少子・高齢社会への対応、持続可能な社会づくりの観点からお話をいただきました。

中学校経験者研修Ⅱ　10月２日㈬

「青年教師に望むこと」

㈱福島映像企画 取締役相談役　**佐藤　祀男** 氏

企業の在り方や役割、人材育成、危機管理の対応等について、これまでの体験から企業と学校の相違点と教師への期待を県バレーボール協会長でもあるお立場から、お話をいただきました。

学校評価研究チーム

『学校経営・運営ビジョン』の改訂に向けて

1　はじめに

前回は、「『学校経営・運営ビジョン』に基づく調査内容の見直しと調査紙づくり」という二つの実践プログラムを取り上げ、具体的な方法を説明するとともに、二つの小学校での実践例を紹介しました。

2　『ビジョン』改訂の必要性

学校評価では、『学校経営・運営ビジョン』を掲げ、それに基づいた実践をし、その上で調査等によって自らの取組みを振り返り、それを改善につなげるという一連の活動が行われます。一度掲げた『ビジョン』は不変のものではなく、調査や実態の変化によって、年度末、場合によっては年度途中でも改訂される必要があります。しかも、改訂作業に教職員一人一人がかかわる場を設定することで、学校組織も活性化していきます。

今回は、『ビジョン』の改訂について取り上げ、実践プログラムの進め方、更に研究協力校での具体的な取組みを紹介します。

3　『ビジョン』改訂の実践プログラム

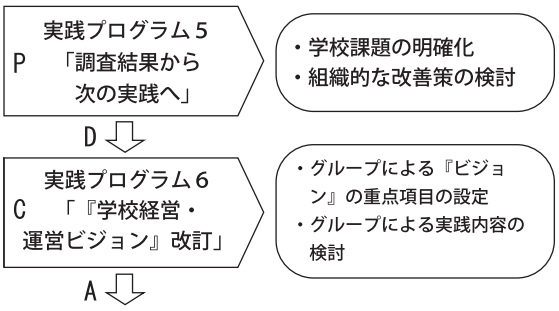
昨年度、学校評価研究チームでは、次の三つのねらいの実現を目指して、七つの実践プログラムを作成しました。(「窓」No.148参照)

＜ねらい＞

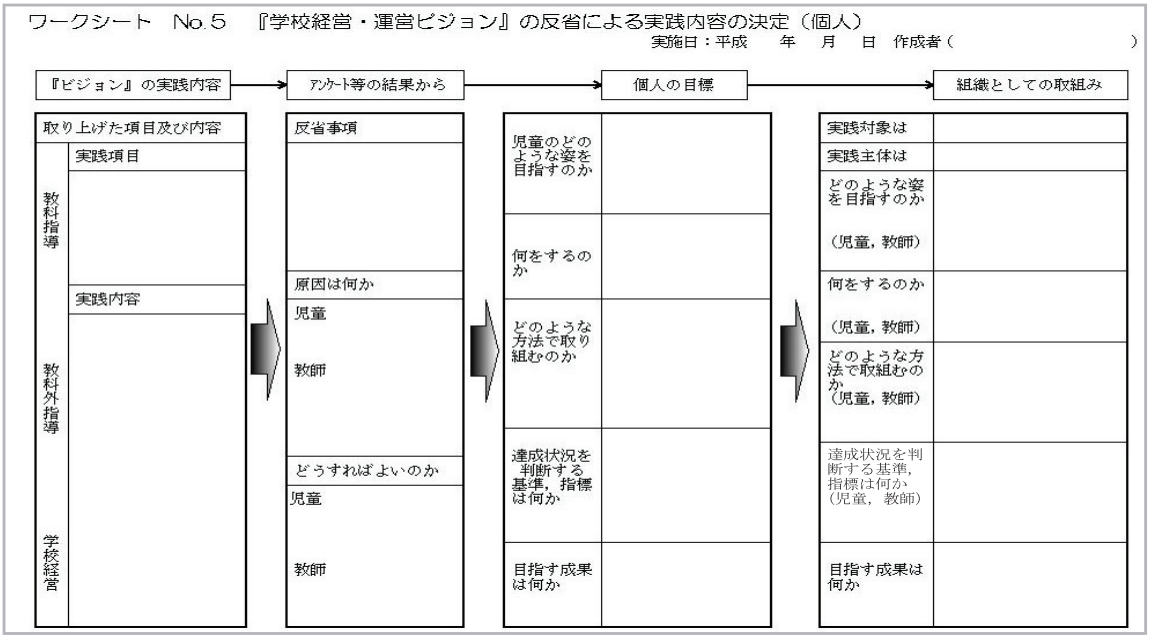
○　教育目標に教職員が向き合う
○　教職員の課題意識の共有を図る
○　実践の主体、手立てを明確にする

七つの実践プログラムの中で、『学校経営・運営ビジョン』改訂に関係するのは、次に示す実践プログラム５と６の二つです。

実践プログラム５は、中間評価を受けた取組みを、プログラム６は、年度末の改訂を想定しています。



プログラムでは、まず、教職員一人一人が課題解決の取組みを考え、次にグループ討議を行い、『ビジョン』の重点項目実現のための具体的な手立てを話し合います。具体的には、以下のような進め方を提案しました。



実践プログラム５「調査結果から次の実践へ」

1　教職員一人一人が、ワークシートNo.5を用いて実践の反省をし、次の手立てを考え、個人の目標を再設定する。

⇩

2　課題ごとに、あるいは校務分掌ごとにグループで話し合いをもち、組織的な取組みの改善策を考える。

実践プログラム６「『学校経営･運営ビジョン』」改訂の手順

1　校長が次年度の経営方針を提示する。

⇩

2　教職員一人一人が、自己評価の結果に基づき、今後取り組むべき重点項目について、現状把握や課題解決の手だて、目指す児童生徒像、課題解決への取組みを考える。

⇩

3　重点項目ごとにグループに分かれ、ワークシートNo.6を用いて、重点項目実現のための手立てや具体的な実践内容、達成基準について話し合う。

⇩

4　校長の経営方針とグループ討議の結果を踏まえながら、学校評価委員会などが次年度の『学校経営・運営ビジョン』の原案をまとめる。

４『学校経営・運営ビジョン』改訂の実践例

ワークシート　No.６

『学校経営・運営ビジョン』の反省と分掌組織の実践

実施日　平成　　年　　月　　日

記録者（　　）

分掌・組織名		主任名	

☆　達成すべき『学校経営・運営ビジョン』の重点項目

『学校経営・運営ビジョン』の重点項目

1　現状把握

児童生徒の現状		そのようになった原因は	課題解決のための手立て
	⇨	子ども	
		教師	

2　課題解決の手立て

実践内容	分掌・組織	教職員
どのような姿を目指すのか		
何をするのか		
どのような方法で取り組むのか		
達成状況を判断する基準，指標は		
目指す成果は何か		

3　児童生徒の目指す姿

児童生徒をどのようにしたいのか	⇨	改訂『ビジョン』の重点項目

4　課題解決への取組み

項目	何をするのか	具体的な手立ては	誰が	期　限	判断基準は	その他
実践内容						

Ａ小学校では、調査結果を基に学校の課題を明確にしたり、課題を全職員で共有したりする機会が十分ではありませんでした。そこで、当チームから『学校経営・運営ビジョン』と関連付けた調査の進め方や『ビジョン』改訂の手順の具体な方法として、実践プログラム５と６を提案しました。

Ａ小学校では、平成17年10月に『ビジョン』の重点項目と関連づけた調査を行いました。その調査結果を基に、学校評議員による外部評価が行われ、成果や課題について協議されました。その後、課題に対する具体的な実践事項を明らかにするために学校課題協議会が開催されました。協議会では、中間期以後の実践を検討し、具体的な手立てについて話し合いが持たれました。話し合うためのグループは、『ビジョン』に掲げられている徳、体、知の課題を教職員が選択することによってつくられました。

11月の第２回学校課題協議会では、徳、体、知のグループごとに、『ビジョン』の重点項目を絞り込むことと重点項目実現のための具体的な手立てが協議されました。さらに協議会の後、各グループから提案された重点項目について、教職員一人一人が次のような観点で再検討しました。

1　この戦略で、学校や子どもを変えることができるか。
2　網羅的でなく、大胆な切り落としが図られ焦点化されているか。
3　人的、時間的、物理的に実践可能か。
4　職員の合意形成は可能か。
5　保護者にとって、学校の取組みが分かりやすいか。
6　実践の結果が分かりやすいか。

再検討された重点項目に基づいた改訂版『学校経営・運営ビジョン』が、職員会議での協議を経て、保護者等に広報されました。改訂された『ビジョン』の各重点項目には、実践化のための手立てと達成基準が示され、年度後半の実践の指針となりました。

５　おわりに

今回は、『学校経営・運営ビジョン』を改訂するための実践プログラムを紹介しました。実践プログラムは、学校の実態に応じて任意のグループや分掌組織等で実施することが可能です。ただし、そのような場合でも、教職員一人一人に課題解決の具体的な手立てを考える場を設けることが大切になります。

＜参考＞

「学校評価の活用　学校評価を生かした学校組織活性化の在り方」
福島県教育センター　平成18年３月

カリキュラム開発研究チーム

分かる授業を目指した導入、発問の工夫

1　はじめに

前回は授業設計における「観」の見直しについて述べました。実際に授業改善に取り組む際に、以下のような悩みを持つ先生もいるのではないでしょうか。

○　教師中心の授業から抜け出せない。
○　学習内容の定着が図られない。
○　自分の授業がなかなか変わらない。

授業は複雑で多様な要素から成り立っており、そのことが、授業改善の難しさにつながっています。しかし、授業の多様な要素は互いに関連があり、まず一つの具体的手立てを糸口として試みることが、授業全体を変えることにつながっていくのです。

今回は、子どもが「分かる」授業を目指して授業を実践する際の、改善のポイントを二つ紹介します。

2　意欲的な追究を促す学習課題の設定

授業の終末に学習成果を確かめようとすると、子どもたちから「何を学習したのか」の確かな手応えがなかったという経験はないでしょうか。

そのような時は、教師が一方的に知識を教え込んでいて、子どもは与えられた課題をこなすだけの、受け身の授業になっていなかったかどうかの振り返りが必要です。

授業は、子どもたちの思いや願いと、教師の授業に寄せる願いとがかかわり合う場であり、学習課題はこの両者の願いが実現できるように設定する必要があります。子どもたちの意欲的な追究を促すためには、学習課題をどのように設定していくかが大切になってきます。

子どもたちの意欲的な追究を促す学習課題を設定するに当たってのポイントは、次の二つです。

○　子ども一人一人の持つ疑問や問題意識を引き出し、自分の問題として学習課題を意識させる教材提示の工夫。
○　一人一人の問題意識を学級全体で共有し、学習課題として練り上げる場の工夫。

次に、教材提示の仕方を工夫することによって、意欲的な追究を促す学習課題を設定した事例を紹介します。

＜小学校４年理科「電気のはたらき」＞

導入では、まず教師が作成したモーターカーを動かして見せました。それによって子どもは、自分も作りたいと考えました。

そこで子どもたちに、電池とモーターのつなぎ方を自分で工夫できるような教材をわたし、試行錯誤しながらモーターカーを作らせました。

すると、後ろ向きに走るモーターカーや、走る速さの違うモーターカーができてくるため、子どもたちは「なぜだろう？」という疑問を持ちました。

その疑問を学級全体で話し合うことで課題を共有し、「モーターカーを前向きに走らせるにはどうしらたよいか？」、「モーターカーを速く

走らせるにはどうしたらよいか？」という本単元の学習課題を設定しました。

……

この事例のように、教材提示を工夫することによって、子どもの疑問を引き出し、学習課題を練り上げていけば、課題解決に向けて、意欲的な取組みの姿が期待できます。

３　納得して「分かる」ようにするための発問

子どもたちが、授業の中では教師の話にうなずき、理解したという表情を見せているのにもかかわらず、その後で確認テストをしてみると、授業の内容が定着していなかったという経験はないでしょうか。

このような場合、学習課題について子ども自身が、「そうか、なるほど。」と納得しながら、学び合いの中で学習していくことが必要です。そのためには教師の確かな教材研究に裏付けられた、授業の軸となる発問の精選が重要になってきます。

子どもが、納得して「分かる」ようにするための発問のポイントを挙げてみます。

○　教師から新たな視点を与えることで、深い理解に導く発問の工夫。
○　学び合いにおいて、子どもの考えを深めたり、多様な考えを引き出したりする発問の工夫。

次に、子どもたちの考えを深めた発問の事例を紹介します。

……

＜中学校理科第２分野「動物の生活と種類」＞

動物の消化と吸収に関する単元で、デンプンやタンパク質は、最終的には小腸の表面にある酵素で分解されることを学習しますが、その酵素が小腸の表面にある理由は教科書には説明されていません。そこで、

Ｔ：「なぜこれらの酵素は、消化液の中ではなく、小腸の内表面にあるのだろうか？」

という発問を投げかけ、腸内にはたくさんの細菌が共生しているという新たな視点も与えて、その理由を考えさせます。

すると子どもたちは、分解した栄養分を腸内の細菌に奪われないようにするためには、吸収する直前に表面上で分解すればよいことに気付きました。そしてそこから、酵素が小腸の表面にある理由を納得して理解していくことができました。

……

この事例のように、ただ覚えるだけでなく、子どもたちがその意味を納得し、理解していくようにすれば、学習内容の確実な定着が図られていくのではないでしょうか。

４　おわりに

日々の授業の改善は、具体的な実践の積み重ねによって可能になります。

私たち教師は、常に子どもの側に立ち、「よし、今日は～を考えよう。」という子どもの内発的な学習意欲を喚起し、「なるほど。」「そうか、分かった。」という達成感を持たせることのできる授業に向けて、学習課題の設定や発問の工夫等を振り返り、改善を心がけていきたいものです。

情報化推進研究チーム

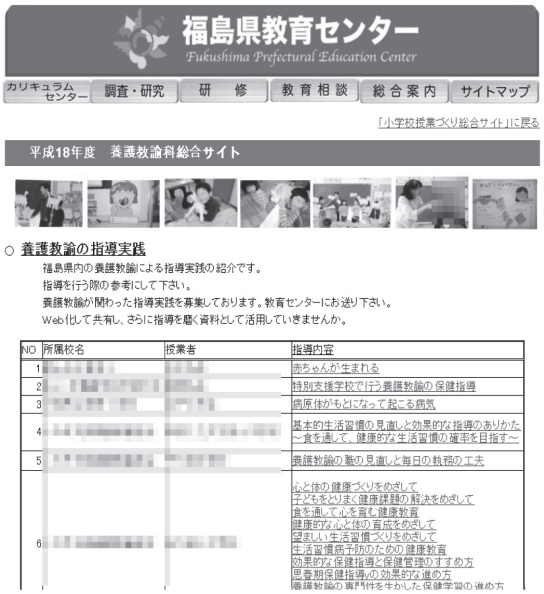
「教員ネットワーク」による教員の交流・協働 ～一人一人の授業力向上を目指して～

前回は、「教員ネットワーク総合サイト」の構築を目指した研究の構想と概要について述べました。今回は、新たにスタートした「養護教諭ネットワーク」と「複式指導ネットワーク」、その他の取組みの状況について紹介します。

1 「養護教諭ネットワーク」

「養護教諭がネットワークを活用して互いに連携し、学校保健に関する情報の共有化を図る」ことが有効であると考え、９月より養護教諭ネットワークを立ち上げました。

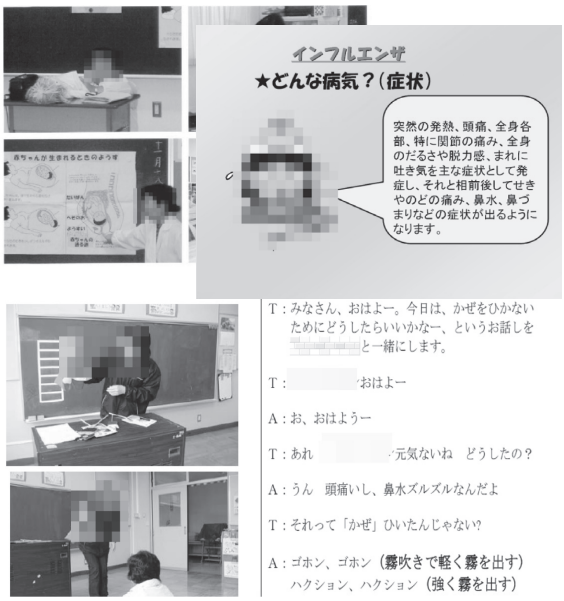
＜養護教諭ネットワークサイト＞



http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/3kenHP/yougokyouyu/hokenh18.htm

現在は、福島県学校保健会養護教諭部会の協力を得て、保健や学級活動等の授業で実践された授業案や画像、プレゼンテーション等の資料を収集しています（これらの資料は、個人のPCにダウンロードすればそのまま活用できるようになっています）。今後は資料を活用した実践を動画等で収集したり、実践前の授業案が検討できる場を提供したりすることで、よりよい授業づくりを目指した協議や意見交換等ができるようにする予定です。

＜授業実践とプレゼンテーションの資料＞

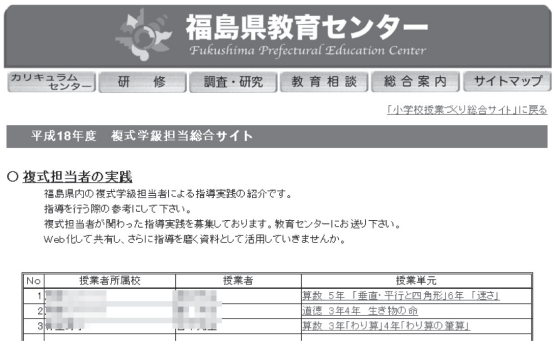


2 「複式指導ネットワーク」

小規模校、特に複式学級を担任する先生方には、同じ課題を共有し協議の輪を広げる場や機会が多いわけではありません。「『ずらし』や『わたり』は授業の中でどのように行えばいいのだろうか？」そういった悩みをもつ先生方をサポートするために９月より複式指導ネットワークを立ち上げました。

複式学級の担任をされた先生方から授業案と動画等の資料をいただき、いくつかの実践を紹介しています。今後、資料の収集を充実させ、複式学級をもつ学校間の連携を図ることで、よりよい授業づくりを目指す情報共有の活性化を支援していきます。

＜複式指導ネットワーク＞



http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/3kenHP/fukushiki/fukushikih18.htm

3　その他の取組み

(1)　各学校メールアドレスの収集

今年度、小・中・高等学校すべてのメールアドレスを収集しました。現在は、教育センターから教育情報の提供を試験的に行っています。また、理数大好きモデル地域事業にかかわる小・中学校と教育機関がメーリングリストを活用し、学校間や学校と教育機関が連携した共同研究や交流学習、教員間の情報交換等を行っています。

(2)　福島県小学校教育研究会の資料収集

＜ネットワーク総合サイト（算数資料）＞

http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/3kenHP/index.htm

福島県小学校教育研究会の資料を収集し、学年・単元別に整理してデータベース化を行っています。この資料は、教員ネットワーク総合サイトの各教科からアクセスし、必要に応じてダウンロードできるように構築しています。

さらに、先生方からよりよい授業づくりを目指し、協議や意見交換等のできる場が欲しいという要望があれば、教育センターではそのニーズにこたえて、ネットワークの構築を行っていきます。

(3)　自主的研究団体の活動紹介

現在、理科教員ネットワークサイトでは、「各種研究会の部屋」より、センターでの理科に関する研修の様子や自主的研究団体による活動の様子等を紹介しています。実際にこのサイトを見た先生が自主的に参加したという例もありました。

＜各種研究会の部屋サイト＞

http://www.center.fks.ed.jp/15ken3/rika/kenkyukai.html

本研究チームは、これからも先生方の授業力向上のため、様々な方向から支援します。

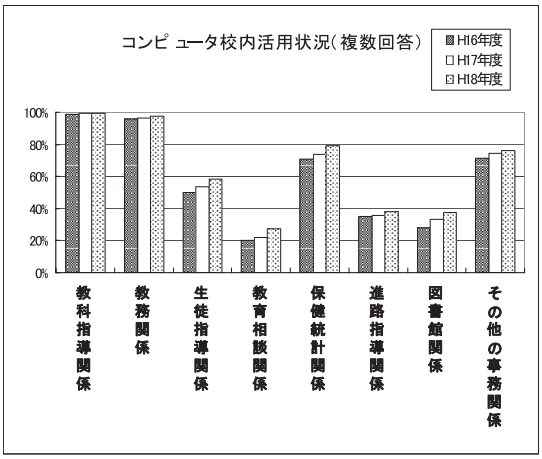
情報化推進研究チーム
TEL　０２４－５５３－３１４１（内線17）
e-mail：shima.kazuhiro@ks15.fks.ed.jp
kunii.hiroshi @ ut33.fks.ed.jp

情報教育チーム

「福島県の情報教育の実態等に関する調査」結果報告

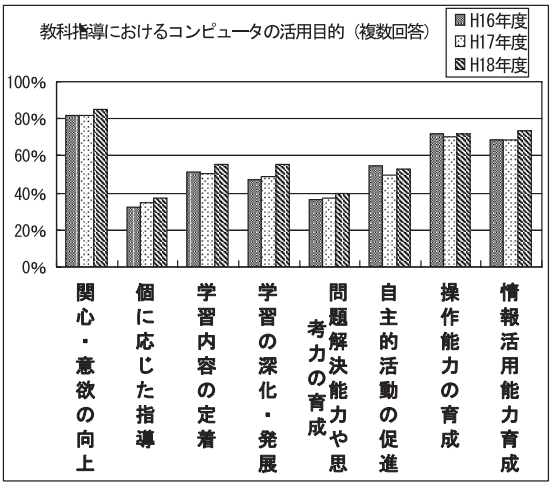
情報教育チームでは県内の公立学校における情報教育の実態等を把握するため、毎年本調査を実施しています。今年度の結果がまとまりましたので、その一部を報告します。

Ⅰ　コンピュータの校内活用状況



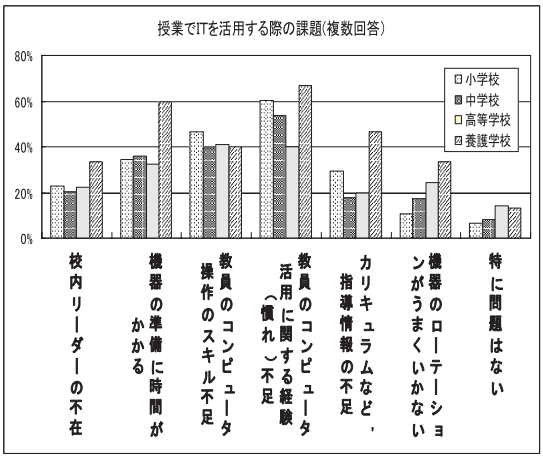
「教科指導関係」「教務関係」での活用が、ほぼ100％になっています。また、すべての項目でコンピュータの活用が進んでいることが分かります。

Ⅱ　教科指導におけるコンピュータ活用目的



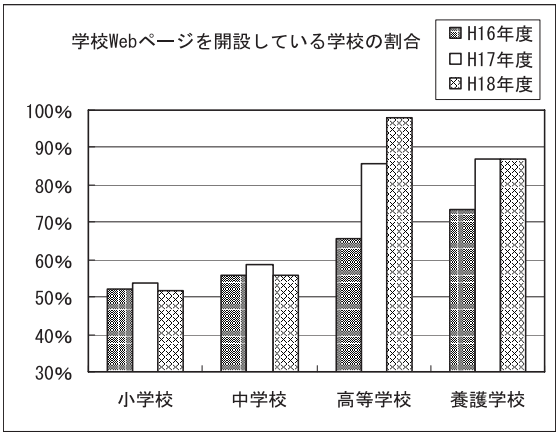
「関心・意欲の向上」を目的とする活用がこの３年間安定して高い割合を示しています。次いで「操作能力の育成」「情報活用能力の育成」の順になっています。

Ⅲ　授業におけるIT活用の課題



授業におけるITの活用が一層求められていますが、「コンピュータ活用に関する経験不足」「操作のスキル不足」が課題として多く挙げられました。様々な研修の機会をとらえて経験を重ねる必要があります。

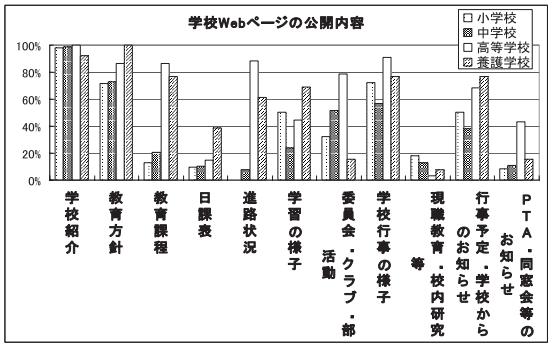
Ⅳ　学校Webページの開設状況と公開内容



全体としては875校中508校（約58%）がWebページを開設しています。その中で高等学校・

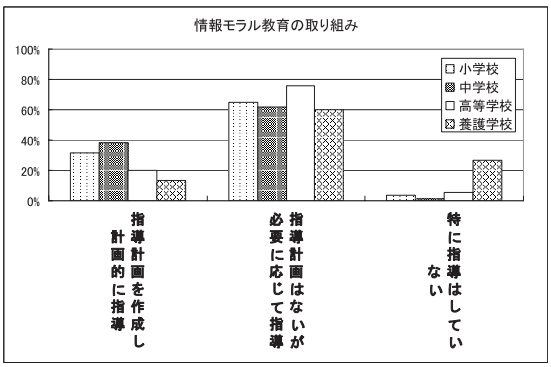
養護学校の開設率は大変高く、特に高等学校では大幅に増加しています。

また、「学校紹介」「教育方針」「学校行事の様子」の順で公開している割合が高い結果となっています。高等学校では「教育課程」「進路状況」も高い割合で公開しています。



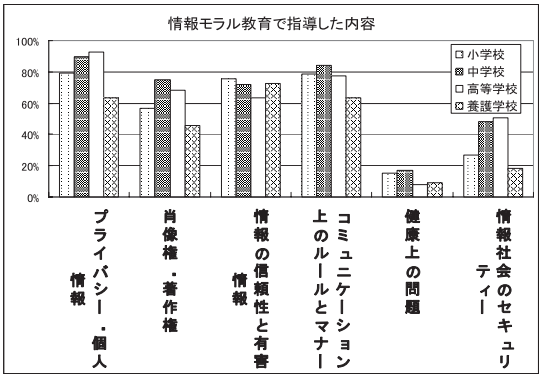
Ⅴ　情報モラル教育について

1　情報モラル教育の取組み



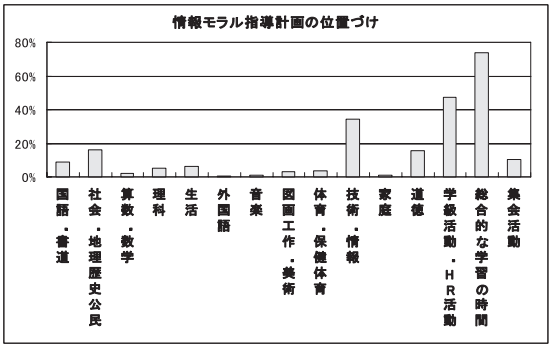
情報モラル教育の充実は、本県の喫緊の課題です。昨年度は、全875校中848校（約97%）で指導が行われました。今年度は、すべての公立学校で実施する予定になっています。

2　情報モラル教育で指導した内容



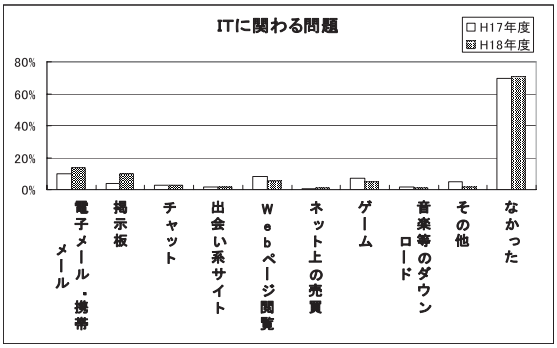
「プライバシー・個人情報」については中・高等学校で90%以上、「コミュニケーション上のルールとマナー」については中学校の84%で指導が行われました。

3　情報モラル指導計画の位置付け



「総合的な学習の時間」「学級活動･ＨＲ活動」「技術・情報」の時間での位置付けが多い中、各教科にも広がりが見られてきています。

4　ＩＴに関わる問題



全体の約７割の学校では、問題はなかったと回答しています。ただ「電子･携帯メール」「掲示板」に関わる問題は、増加傾向にあり、今後、機会をとらえて指導が必要です。

Ⅵ　おわりに

前記以外の調査項目と詳しい分析結果は、教育センター Webページ（http://www.center.fks.ed.jp/）に掲載していますのでご覧ください。また、この調査結果を基に、情報教育研修の充実に努めてまいります。ご協力いただき、ありがとうございました。

教科外教育チーム

SWOT分析で各校の重点事項を創る
～ミッションに基づいた重点事項を～

各校の学校経営ビジョンにおける重点事項は、焦点化して教育活動にあたるために欠かすことはできません。重点事項の策定は、各校のやり方で行われておりますが、今回は、策定の一つの効果的な方法を紹介します。

Ⅰ　ミッションの探索

1　ミッションは

「学校の存在意義、使命」と言われるもので、「○○（貢献対象）に、△△（貢献方法）をすることで、□□（貢献内容）する」と表現します。一般的な学校のことではなく、「わが校」ならではのミッションを探索し、具体的に表現することが重要となります。児童・生徒や保護者が学校に対して何を期待しているのか、実際に何ができるのか、現実に今は何ができているのかを十分に踏まえて探索することが望まれます。

2　ミッションの例

各学校により貢献対象は様々ですが、少なくとも、児童・生徒、保護者、地域社会の三つの貢献対象についてミッションを探索する必要があります。児童・生徒に対するミッションの一例を挙げれば、「児童・生徒個々の特性に応じた指導を実践することで、確かな学力を身に付けることを目指す」となるのではないでしょうか。

Ⅱ　ミッションのＳＷＯＴ分析

1　ＳＷＯＴ分析とは

詳細は、本誌の前年度発行147号22～23ページを参照してください。一言で言えば、学校を取り巻く内外の環境分析です。

2　ＳＷＯＴ分析の方法

前記のミッション例を基に具体的に「学習面・学力面」のＳＷＯＴ分析を行ってみます。

⑴　学校内の強み等の分析

学校内の環境で大きく影響する内部環境要因、この場合「生徒」「教職員」等です。

まず、「生徒」の学習面・学力面に関する「客観的な特徴・事実」を列挙します。次に、事実・特徴から考えられる「強み」と「弱み」を検討します。

【内部環境要因：生徒（学習・学力面）】（表１）

□　客観的な特徴と事実
- 知能偏差値は高いが、学力検査では全国平均より下である。
- 教師の指示に素直に応じる子がほとんどである。
- 特定の子が授業についてこられない。
（以下略）

□　「事実と特徴」から考えられる「強み」
- ○個の学習スタイルにあった指導方法ができる。
- ○能力の高い子を教師役とするＴＴの導入が可能。
（以下略）

□　「事実と特徴」から考えられる「弱み」
- ●教師主導の授業展開が多くなる。
- ●教師の意識が授業の遅れがちの子に集中する。
（以下略）

一つの要因の分析が終わったら、次の要因である「教職員」、…、について同じように繰り返します。

⑵　学校外の支援的に働く場合等の分析例

学校外の環境で大きく影響する外部環境要因、この場合「保護者」「小（中）学校」等が考えられます。まず、「保護者」の学習面・学力面に関する「客観的な特徴・事実」を列挙します。次に、事実・特徴から自校の運営や教育活動に「支援的に働く場合」と「阻害的に働く場合」を検討します。

【外部環境要因：保護者】　（表２）
□　客観的な特徴と事実
（略）
□　「事実と特徴」からの「支援的に働く場合」
○教育講演会等、学校の教育活動に強い関心がある。
（以下略）
□　「事実と特徴」からの「阻害的に働く場合」
●授業の進め方に対する不満が寄せられる。
（以下略）

⑶　重点事項候補の検討手順

分析の例（表１、表２）は、生徒と保護者の二つの環境要因の分析のみですが、本来はミッションに大きくかかわる要因をさらに分析するようになります。また、各校にはミッションが複数あるので、それぞれのミッションについてＳＷＯＴ分析を行います。各ミッションに関連する内外環境の分析をした後に、具体的な実行策＝重点事項を検討するようになります。下の表のように分析した結果をミッションごとに「強み」と「支援的に働く場合」に分類し、実行策を検討すると分かりやすくなるでしょう。

強み	支援的に働く場合
ア　個に応じた指導方法 イ　能力別の学習展開 以下略	a　家庭学習の改善 b　課外授業への理解 以下略
（実行策） □　個の能力に応じた家庭学習（ア、ａ） □　生徒の求めに応じた課外授業の実施（ア、ｂ）	

上のアとａにより「個の能力に応じた家庭学習」の実行策が考えられ、このような「強み」と「支援的に働く場合」を相互に生かす実行策が効果的であり、これが各校の特色となります。この段階で重点事項の候補をいくつか考えるようになります。

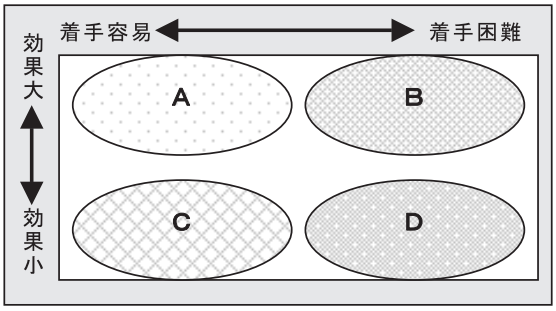
Ⅲ　重点事項の決定

１　重点事項候補の絞込み

重点事項の候補を三つから五つ程度に絞り込む作業になりますが、次の観点で絞ると効果的です。

○　その実行策の着手が容易か困難か
○　その実行策は効果が大きいか小さいか

実行策を一つずつ付せんに書き出し、次のシートに観点にそって貼ると把握し易いです。



付せんを貼り終えた後のシートの見方は、優先順位として、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄとなります。Ａは「早速取りかかるとよい」、Ｂは「長期プランによって確実に」、Ｃは「やってみると発展する可能性あり」、Ｄは「とりあえず、やらないほうがよい」領域となります。

２　重点事項決定後の取り組み

検討された重点事項がミッションの範囲内であるかどうか、ミッションを達成するための内容かどうかを見直すことが重要となります。また、この段階での重点事項は中・長期的な内容となるものであり、今年度は何について取り組むか、さらに具体的な方策を検討することが必要になります。

具体例を挙げて説明しましたが、いずれの分析や検討でも、教職員間のコミュニケーションが基本となり、教職員全員が参画して重点事項、そして学校経営ビジョンを創り上げていくことが求められます。下の表は、ある学校のミッション探索から重点事項検討までの展開例です。各学校の実態に応じた展開でミッションに基づいた重点事項を創ってはいかがでしょうか。

手順	内　　容	時　期
1	学校組織マネジメント概論・手法紹介	９月ころ
2	ミッション探索／ＳＷＯＴ分析／次年度学校経営方針の提案づくり	10月～11月
3	学校経営方針提示／重点事項及び次年度重点事項・具体的方策等検討／学校経営ビジョン確定	12月～３月
4	学校経営ビジョンの確認と今年度重点事項と具体的方策検討または確認／具体的方策実現のための運営方策検討	翌年度 ４月上旬

教育相談チーム

自傷行為を繰り返す生徒への対応

～ 教師にできること ～

「一昔前に比べ、生徒の考えを理解するのが難しくなってきた」と感じている先生方は多いことと思います。その理由の一つとして「彼らのSOSサインが多様化してきている」ことが挙げられます。それらが暴力や窃盗等の形で表出されるケースには慣れている先生方でも、リストカットやオーバードーズ（薬の過剰摂取・以下ＯＤ）といった、自分を傷つける形で表出されるＳＯＳに対しては、その行動の異常さ故に驚きや嘆きが先行してしまい、「SOSのサインとして理解する」ことが後手に回ってしまう傾向にあるようです。今回は、大人に対するメッセージをリストカットやＯＤといった方法でしか表出できない状況に追い込まれている生徒への対応例について考えます。

〈事例〉自傷行為を繰り返す沙織

２時間目が始まって既に15分がたとうとしている７月のある日、沙織（高校２年生女子）はいつもと変わらぬ笑顔で教頭先生のところへ遅刻届を書きにやってきました。

沙織　教頭先生、おはよ。
教頭　おはよう。今日はどうしたの？
沙織　ちこくぅ。
教頭　それは分かるって。遅刻の理由を聞いてるの。また寝坊したの？
沙織　違うんだっけー。今日は早起きして自分でお弁当作ったんだよ。それなのにうちの親ったらさー。
教頭　何か言われたの？
沙織　「勉強も手伝いもしないくせに、飯ばっか食って」なんて言われたら、誰だってアタマくるじゃん……。あ、早く授業に行かなくちゃ。教頭先生、ハンコハンコ。
教頭　こら！ハンコハンコとは何だ。人が心配して言ってるのに。
沙織　ごめんなさーい。でも２時間目出ないとマジやばいんだっけ。お願い、教頭先生。
教頭　まったく……。

翌日も沙織は遅刻してやってきました。真夏だというのに、長袖のブラウスを着て。

教頭　おはよう沙織。
沙織　（無言）
教頭　どうした？また家で何かあったの？
沙織　……べつに。はいこれ（遅刻届を出す）。
教頭　最近遅刻多いね。今年も去年みたいに時数不足で補充するようになっちゃうぞ。
沙織　（無言でうなずく）

昼休みが終わる頃、沙織が保健室の町田先生（40代女性）のところにやってきました。

沙織　先生、暑ぅーい！
町田　暑いねー。沙織もこの暑いのによく長袖……。ん？あなたひょっとしてまた……。
沙織　また、なーに？
町田　なーに、じゃないわよ。ちょっと見せてごらん。……やっぱり。何でまた？
沙織　なんかイライラしてさ。

町田　まったく何度同じことをやるのやら……。
沙織　先生、これ（傷跡）が消える頃には、もう夏も終わってるよね。

１学期の終業式前日、沙織は左手首にサポーターを巻いて登校してきました。心なしか目もうつろです。心配になった担任の加山先生（30代女性）は沙織を保健室に連れていきました。

町田　何、このサポーター？……ちょっと！これはまずいなぁ……。ここまで深く切ってて、家の人は何にも言わないの？
沙織　……親は……知らない……。
町田　「知らない」じゃ済まない傷よ。これは病院で縫ってもらわなくちゃ。

傷口の縫合は30分で終わりました。会計の際、町田先生は驚きました。請求額が２万円だったのです。自傷行為の治療には保険が適用にならないことを、町田先生は初めて知りました。

町田　お金もかかってるし、家の人に言わない訳にはいかないわ。おうちの方にもあなたの苦しさを分かってもらわなきゃ。ね。
沙織　……うちの親は心配なんかしないよ……。
町田　え？

この日のことは、加山先生から母親に伝えられました。しかし電話に出た母親は特段心配する気配もなく、「そうですか。分かりました。」とだけ言って、電話を切ってしまいました。

加山　「分かりました」って、それだけ？娘がこれだけのことをしてるのに……。

翌日の沙織は、昨日にもまして血の気のない表情と、おぼつかない足取りで登校してきました。教頭先生は、沙織を見るなりあわてて彼女の手を取り、保健室に連れて行きました。

町田　沙織！分かる？
沙織　……うん。……どうしたの、先生……。
町田　どうしたの、じゃないわよ！あなた何をしたの？
沙織　……くすり……全部……。
町田　教頭先生！私、病院に連れて行きます！

病院での胃洗浄を終えた沙織は、低く、小さな声で、町田先生に話し始めました。

沙織　先生、また迷惑かけちゃったね……。私みたいな生徒、いない方が楽でしょ……。
町田　そんな悲しいこと言っちゃだめよ。
沙織　……なんで先生が悲しいの？自分の娘でもないのに……。
町田　そんなこと言われたら、誰だって悲しいわ。あなたの親だって……。
沙織　……親？うちの？

沙織は引きつった笑みを浮かべながら、リストカット痕のかさぶたをはがし始めました。

沙織の一件を重く見た校長先生は、両親に来校してもらい、彼女の状態を説明しました。しかし両親からは「そんなことをしているとは知らなかった」「私たちも自分たちのことで精一杯で」という言葉が返ってくるだけで、娘を心配する言葉は一言も聞かれませんでした。

校長　娘があれだけのことをしているのに「知らなかった」はおかしい。子育てを否定されるのが怖いのか、それとも「気付き

たくない」何かがあるのか……。

その後校長先生は、沙織にかかわる先生方を集め、今後の対応について話し合いました。

加山　私たちの思いが彼女に届いていない気がするんです。「自分を傷つけちゃダメ」とあれだけ言っているのに……。

佐藤（教科担任）　手首を切ったり薬を大量に飲んだりなんて、異常ですよ。我々が対応できる限界を超えていますよ。

清水（生徒指導担当）　彼女は他人を傷つけたりはしないんでしょう？だったらいいんじゃないかなぁ。放っといても。

大越（教育相談担当）　先生方のおっしゃることはちょっと違うと思いますよ。「自分を傷つけるな」という言葉は、一見生徒のことを心配しているように見えて、実は教師自身が自傷行為の気味悪さに耐えられなくて、自分の不安を解消したくて言う場合があるんですよ。

校長　なるほど……。

大越　沙織の行為は確かに普通ではないと思います。でも、自傷行為そのものは死ぬことを目的とはせず、むしろ生きていることを確認するためにしている、と言われています。佐藤先生が言うように援助できる限界はあるかもしれませんが、だからと言って「我々には分からないから自分で何とかしろ」と言うのも、あまりにも酷だと思うんです。

町田　沙織が他人を傷つけたりしなければ、あまり心配しなくてもいいんでしょうか？

大越　それも違うと思います。自傷も他害も、自分に内在する怒りや寂しさ、空しさに耐えきれなくなった時に表出される、という点では同じですから、沙織が他害に転じないとは言い切れませんし、「内向的な子は他害をしない」とも言えません。いずれにしても、自傷も他害もＳＯＳのサインであることに違いはありません。

ここで、自傷行為への対応と理解の仕方についてまとめておきます。

1　「知的サポート」より「情的サポート」

「やってしまった」結果にのみ着目して、非難したり指導したりする（知的サポート）よりも、その行動の背後にある「辛い気持ちを汲んでほしい」という思いに理解を示す（情的サポート）ことの方が重要である。

2　大切なのは情的に「つながる」こと

リストカットは文字通り「切る」行為であり、それを止めるには反対の「つなぐ」行為が必要になる。「切りたいくらい辛かったんだね」という「情的サポート」をしていくと、生徒との間に信頼関係が生まれ、心的に「つながる」ことができる。その関係性の中で体得できる「安心感・安全感・大丈夫感」こそが、生徒の不安定な心を癒していく。

3　自傷行為は言語化できない思いの行動化

「言語化できない（してもわかってもらえない）」ために、最後の手段として、体を張って「辛い」「苦しい」「見てほしい」「気にかけてほしい」という思いを訴えている。

4　根底にある「自尊感情」の低さ

被虐待児や、いわゆる「機能不全家族（温かみがない、親がアルコールやギャンブルの依存症である等）」の中で育った子どもは、自尊感情が低くなり、自傷や他害に及ぶリスクが高くなる傾向にある。彼らに対し「あなたは大切な存在なのだ」というメッセージを教師が本心から投げかけること、または、投げかけ合う集団の雰囲気を作ることが、彼らの「自尊感情」の向上につながる。

５ 「親の癒し」が「子の癒し」につながる

親を指導することは難しいが、親の労をねぎらうことや、子どもへの接し方を一緒に考えることは教員にもできる。親の安定が子どもの心の安定につながっていく。

６ 「自傷は死なない」とは言い切れない

自傷行為そのものは自殺未遂とは言えないが、リストカットやＯＤがエスカレートした結果、偶然致命傷に至ったり致死量に達したりすることはある。自傷が見られた際には、慎重な経過観察が必要となる。「自傷は死なない」と高をくくることが最も危険である。

２学期に入っても、沙織のリストカットが止まることはありませんでした。しかし、沙織の行為に気付いた先生方は、「切らなきゃ済まないくらい辛いことがあったのかい？」や「苦しかったんだね」という言葉を意識してかけるようにしました。町田先生も、今まで以上に丁寧に傷の手当をするように心がけました。

学年末、沙織は赤点科目を二つと、時数不足科目を三つ抱えることになりました。おそらく以前の沙織なら、自暴自棄になっていたことでしょう。しかし今の沙織は違いました。追認考査も時数補充もしっかりこなし、無事に３年生への進級を決めました。

加山　沙織、偉かったよ。よく頑張ったね。
沙織　へへ。……最近さ、みんなと一緒に卒業したいって思うようになったんだ。
加山　へー。なんか心境の変化でもあったの？
沙織　なんかさ……私みたいな生徒でも、本気で心配してくれるじゃん、加山先生も町田先生も。だからさ、ちょっとだけ頑張ってみようかなって思ったんだよね。
加山　そっか。そう言ってもらえると、私もうれしいな。できればリストカットもやめてくれるといいんだけどなぁ。
沙織　……それはまだ約束できないかな。でも前に比べたら全然やってないよ。ほら。

沙織の腕に刻まれた無数の傷跡は、確かに薄くなってきていました。加山先生はその傷跡に触れながら、沙織の心の傷も薄くなる日が来ることを、願わずにはいられませんでした。

終わりに

自傷行為にはこのほかにも、自分の髪を抜く、頭や拳を壁に打ちつける、タバコの火を体に押しつける、体をひっかく、安全ピンで手の甲等に傷書きをする、かさぶたを無理やりはがす、指や腕をかむ、などがあります。ここから分かるように、自傷行為は小学生にも見受けられる行動であり、虐待同様、注意して見守らなければならない重要な問題の一つでもあります。

子どもの成長を支援する者は、常に彼らの体の傷に「目」を配り、それを見つけた時には「声」をかけ、彼らの自傷が止まることを祈るように「心」を配る、といった「目かけ・声かけ・心がけ」を意識的に行うことが大切です。

現実には「教師にできること」のレベルを超えるケースも数多くあります。この場合は専門医による本人並びに家族への治療が必要となります。すべてが学校で対応できるわけではないことも併せて理解しておく必要があります。

（参考文献）

・気づいて！子どもの心のＳＯＳ　星野仁彦
VOICE

教科教育チーム

地域素材の教材化 ～地名からさぐる地域の姿～

1　はじめに

中学校学習指導要領社会科解説では、「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身に付けさせる。」とされ、このねらいを達成するために、民俗学などの成果や地理的分野との連携に配慮することも大切なこととされています。

今回は、地域素材の教材化の視点から「身近な地域の歴史」の中で扱っている「地名」を取り上げて考えていきます。

2　「地名」について

わたしたちは日常的に「地名」を使っていますが、その成り立ちや語源について考えることはあまりないのが現状のようです。「風土記」や江戸時代の地誌(※1)などがありますが、学問的に「地名」を研究したのは、民俗学者の柳田国男が最初と言われています。多くの歴史研究者も折に触れて「地名」について研究しています。こうした研究を基に地名について考えてみましょう。

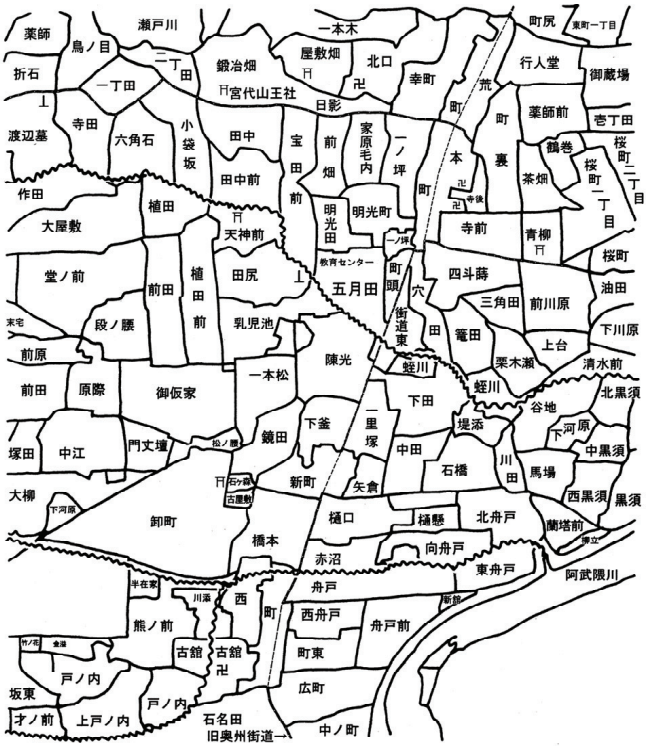
まずは、「地名」そのものの特徴について知る必要があります。一つめは市町村名－大字－小字－番地のように階層性があること。二つめは行政機関や地域住民が一般的に使っている地名があること。三つめは地域の住民だけで通用する地名があることです。いずれにしても、ある機関や人物にとって必要とされる情報は、その必要の度合いが大きくなるにつれて、詳しくなっていく傾向があるようです。

次に、地図で用いられている地名は、必ずしもその土地の地形的な特徴や由来を示したものとは限りません。また、昔からの地名がそのまま残っているとも限りません。例えば、新興住宅地のように宅地造成され、新しい地名となることも珍しくありません。教育センターのすぐ西側に墓地があります。現在の地名は田尻ですが、「信達一統志」（1841）には寺崎、明治７（1874）年の村絵図には地崎と書かれています。「ぢさき」と読んでいたのでしょうか。この地名も墓地にある看板に地先と記されているにすぎず、広くは知られていません。

さて、地名を詳しく調べるにはどのようにすればよいのでしょうか。まとまったものとしては「日本地名大辞典７福島県」が比較的入手しやすいでしょう。この辞典は、古文書や明治初期の地籍図から地名を取り出して掲載しています。このほかにも、高度経済成長期以前の地図や現在の住宅地図も参考になります。さらには「地名用語語源辞典」も語源を探る上で参考になります。

3　地名からさぐる地域の特色

次の地図は教育センターのある五月田周辺の地名を瀬上・宮代・鎌田地区にわたって小



字ごとに区切ったものです。いくつかの地名を取り上げ推察してみましょう。瀬上の宿の入口と出口に当たる部分に町頭と町尻という地名が残されています。町に住んでいる人たちがどちらを中心に見ていたか、興味深いところです。荒町（アラマチ）は本町（モトマチ）と対にあるので、漢字で新町と考えてもよさそうです。町裏は、本町・荒町に対しての町裏ですから、店（タナ）と裏店（ウラダナ）との関係に相当する可能性があります。幸町は過去には町裏と称していました。五月田は、御田植え神事に供された田であった可能性があります。明光田や宝田前も同じような性格の田かもしれません。油田もその田の状況を示すものか、それとも寺社の灯明の資金を捻出するための田かもしれません。一ノ坪は、瀬上小学校の所在地ですが、実際はこの周辺にも同じ地名が残っており、もっと広がりを持っていたようです。この地名は条里制に関する地名として知られ、福島市北部の条里遺構として着目されています。

宮代（ミヤシロ）という地名は、御社（ミ・ヤシロ）や宮城（ミヤ・シロ）とも表現されていました。「御」という接頭語は、公と認知されている場合に使われています。宮代山王社の南側に田中という地名がありますが、過去に「御敷田」とも記されていました。そのほかにも、北信中学校のある御仮家や瀬上町東方の御蔵場も、公の性格の強い場所であったと考えられます。家原毛内（カワラケウチ）のカワラケは、素焼きの小皿を指すと考えられます。この小皿は祭祀に使われることが多かったようです。このことから宮代山王社とのかかわりが推察されます。六角石は、その土地にある石造物の呼称が地名になったもので、吾妻鏡の文治５（1189）年９月条に出てくる傘卒塔婆を指しているものとされています。

4　おわりに

今回は、地名という素材を使って教材化するために、教育センター周辺の地名について考えてみました。

こうした地名は、一般化しにくい部分もありますが、その地域にある館や寺社、町などの周辺の地名が、ほかの同じような場所でどのように使われているのかを調べて比較してみることも大切なことです。このような作業を積み重ねていくことで、教科書で学習する内容との結び付きが見えてくるようになります。

※１　「新編会津風土記」「奥相誌」「信達一統志」など

教育実践

平成17年度 長期研究員の研究から

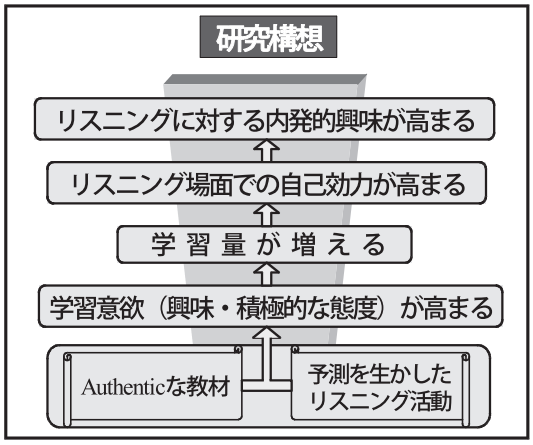
英語リスニング意欲を高める英語リスニング指導の工夫
～Authenticな素材と予測を生かした活動の観点から～

二本松市立二本松第二中学校 教諭
菊 地 一 彦

Ⅰ 研究の趣旨

英語教育を取り巻く環境を概観すると、1980年代の英語指導助手導入に続き、平成10年の学習指導要領の改正では、国際化の進展に対応して、中学校で外国語科が必修教科になり、外国語による実践的コミュニケーション能力の育成が一層重視された。しかしながら、依然として英語を聞き取れない、話せない生徒が多いのが現状である。それらの問題の原因として、「リスニング意欲」、「教材の質」、「リスニング指導法」の三点が考えられる。

本研究では、上記三点を改善するため、学習者にAuthenticな英語（英語圏の実際場面において、英語を母国語として話す人の英語）を提供できる外国映画を教材とし、予測を生かすという具体的な活動を取り入れることで、中学生・高校生のリスニング意欲の向上を図った。



Ⅱ 研究の概要

1 研究仮説

仮説１　学習者はリスニングに対する興味を高めるであろう。
仮説２　学習者はリスニング場面において不安が少ない積極的な態度を促進できるであろう。
仮説３　学習者は学習量を増加させ、リスニング場面における自己効力を高めるであろう。

2 研究計画

(1) 対象者　福島県内公立中学校３年生
161名
福島県内県立高等学校３年生
97名

(2) 条件の設定

○ リスニング力に応じた群分け（中高共通）
上位群・中位群・下位群

○ 学習スタイルに応じた群分け（中学生のみ）
視覚優位群・聴覚優位群・運動覚優位群・
それらの複合型群

(3) 教材の選定及び提示

事前アンケートを行い、中高生に共通して興味が高かった映画を７本選んだ。その中から、

タ イ ト ル	時間	言語の使用場面	言語の働き
スパイダーマン	14(秒)	a 御礼とそれに対して	c 礼を言う
ハリーポッター賢者の石	22	b 動物園で	c 礼を言う
ターミネーター	6	a 月日を尋ねる	b 質問する
タイタニック	32	a 遭難時の捜索	b 質問する b 約束する
ハリーポッター賢者の石	39	b 駅の構内で	b 質問する c 応援する

既習事項を中心として、実践的コミュニケーション能力を高めるのに重要な表現が含まれている21の場面をリスニング教材として選んだ。提示の際には、言語の使用場面と言語の働きを明確にするとともに、学習者の負担を考慮し、１場面当たりの提示時間を短くしたり、部分聞き取りの形式を取り入れたりするなどの工夫をした。

13　「ターミネーター」から：サラコーナーという女性に会うために、警察署にやってきた**ターミネーターと受付人**との会話です。サラコーナーの友達だと言うが、供述中の彼女に会うことができない、ターミネーターは、**「まだ来る」と言って、立ち去ります。**

ﾀｰﾐﾈｰﾀｰ：(1　　)(2　　)(3　　)(4　　)Sarah Connor.
I was told that she's here.　Could I see her, please?
Police　：No.　You can't see her.　She's making a statement.
ﾀｰﾐﾈｰﾀｰ：(5　　)(6　　)(7　　)?
Police　：Look, it may take a while.　If you wanna wait, there's a bench over there.
ﾀｰﾐﾈｰﾀｰ：(8　　)(9　　)(10　　).

*この場面を見たことがあるかどうか。（ある、ない）
*自分の予測はどの程度だったか。
〈 A：予測通り，B：ほぼ予測通り，C：予測と大分違う，D：予測と全く違う，E：予測できなかった 〉
*今回のチャレンジの感想
〔　　〕

⑷　研究方法

①　Authenticなリスニング教材に対する興味
②　リスニングに対する一般的興味
③　リスニングに対する積極的な態度及び不安
④　リスニング場面での自己効力
⑤　リスニング力テスト
⑥　自主学習用リスニング教材の活用状況

①～④は質問紙で回答を点数化し、⑤はリスニングテストを実施し、それぞれ事前・事後で比較した。⑥は全指導終了後、活用希望者の把握と家庭での自発的学習の実施状況からとらえた。

３　リスニング指導の実際

リスニングノートを使用しながら学級単位で行い、英語の授業時間内の最初の10分間～15分間にWarm-upとして設定した。説明や指示は、学習者の学習スタイルに十分配慮して行うとともに、学習者の表情やつぶやきを適切に取り上げるよう配慮した。段階ごとに以下に示す。

1	場面を知る	＊言語の使用場面及び言語の働きを含めた全体的な場面の説明をすることで、物事を全体的にとらえることを得意とする学習者や、聴覚情報からとらえることを得意とする学習者に対して、場面をとらえやすくする。 ＊音声なしの映像を提示し、時系列で場面を説明することで、物事を順序立ててとらえることを得意とする学習者や、視覚情報からとらえることを得意とする学習者に対して、場面をとらえやすくする。
2	予測する	＊聞き取る表現を個人で予測させる。「はずれてもよい」ことが大原則で、文章予測が困難な場合は、キーワード予測を認め、全ての学習者の予測を活性化させる。 ＊個人の予測を、仲間との話し合い、全体の中での発表を通して、修正・発展させながら再構築させる
3	聞く	＊予測を生かしながら、「聞く」「見る」「書く」活動を通して、集中して聞き取らせる。 ＊リスニングに集中させるために、綴りに自信がない場合は、カタカナでの書き取りを認める。 ＊数回視聴後、聞き取った内容を仲間と確認させ、教材への関与を深めさせる。 ＊さらに視聴させ、聞き取った内容を決定させる。自信がない場合は、ヒントカードを利用させ、答えを選べるようにする。ヒントカードの利用は生徒の意志による。 ＊解説用紙を配付し、チェックをさせる。適用可能な予測表現はきちんと認める。「知っていると便利な情報」を解説用紙に加え、リスニングの基礎知識（音の変化、強勢、イントネーション等）に触れさせる。
4	まねる	＊「正確に言うことのできる英語は、聞き取ることができる」の視点から、発話の練習をきちんと行わせる。 ＊役者になったつもりで、聞き取った表現を、口や体を使って実際に発音させる。このことで、場面に応じた表現を心がけさせる。 ＊「声の大きさのものさし」を作成し、自然に音量調節ができるようにするとともに、場面に応じた声の大きさに気付かせる。
5	確認して聞く	＊確認しながら視聴させ、リスニングの基礎知識をもとに、「聞き取れる」という自信を高めるとともにリスニング意欲を向上させる。 ＊感想を記入させ、感想内容をもとに個人に迅速にフィードバックする。また、感想集として配布する

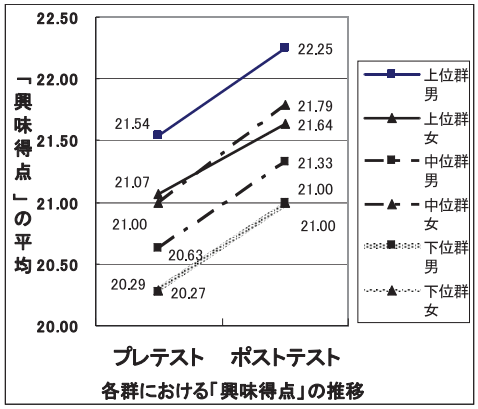
Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

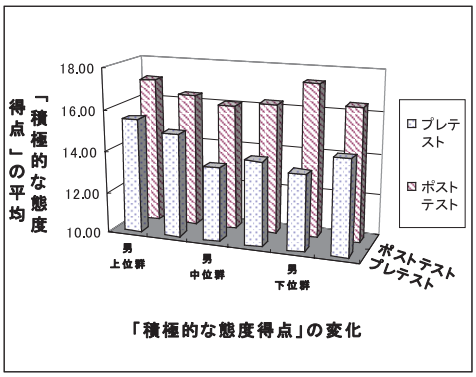
中学生、高校生のどちらにおいても、リスニング力の差に関係なく以下のような結果が得られた。また、中学生における学習スタイルに応じた群分けでも、同様の結果が得られた。これらのことから、研究仮説は立証されたと言える。

①　Authenticな教材に対する興味の向上
②　リスニングに対する一般的興味の向上
③　リスニングに対する積極的な態度の促進とリスニングに対する不安の軽減
④　リスニング場面での自己効力の向上
⑤　リスニング力の向上
⑥　自主学習用リスニング教材の活用

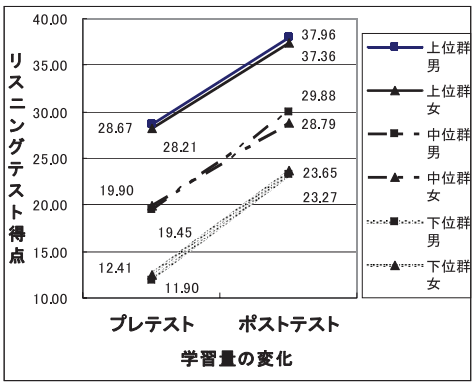
リスニング教材を希望し、自発的にリスニングを行った生徒は、中学生で156名、高校生で32名だった。中学生の結果の一部を下図に示す。



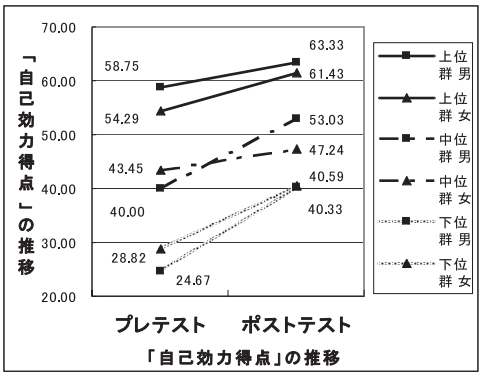
各群における「興味得点」の推移



「積極的な態度得点」の変化



学習量の変化



「自己効力得点」の推移

2　課題

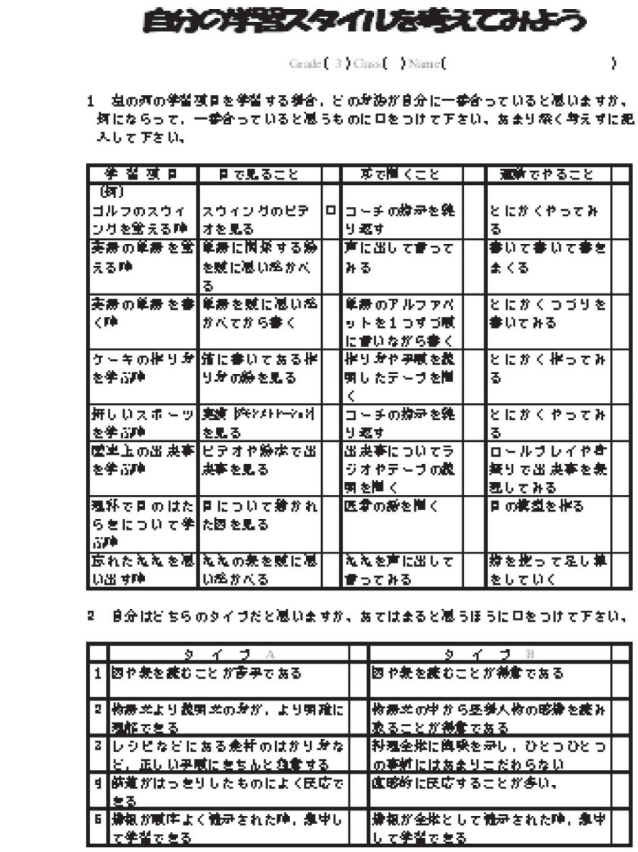
本研究では、外国映画のリスニングを通して、リスニングの基礎知識に触れてきたが、授業の中に音声指導を系統的に位置付けて継続した指導を行うことで、生徒のリスニング意欲がどのように変化するかは、今後の検討課題である。また、聞き取る語数を拡大したり、新出事項の紹介として位置付けたりするなど、リスニング場面を拡大した場合の効果の検討も必要であると思われる。

さらに、学習者の認知スタイルを的確に把握し、認知スタイルに応じたリスニング指導も研究されなければならないと考える。 本研究では、感覚器官ごとの認知スタイルで条件を設定したが、これに、処理スタイル（同時処理、継次処理）を掛け合わせ、さらに、細分化された認知スタイルに応じた指導研究が必要になってくると思われる。

Ⅳ　現在の実践

1　認知スタイルの把握

「生徒の認知スタイルを把握するのは大切だと思うが、方法が複雑だ」という声を多く聞いていた。そこで、筑波大の熊谷恵子先生が考案された質問紙法を改良して、簡単に認知スタイルを把握できる質問紙を作成した。質問紙に記された○印を分析すると、およその視覚優位、聴覚優位、運動覚優位、同時処理優位、継次処理優位を把握することができる。授業の中で、それぞれの認知スタイルに対応していくことで、イメージ化がしやすくなり、学習内容の定着につながるのではないかと考えた。使用した質問紙を以下に示す。



自分の学習スタイルを考えてみよう

Grade(3)Class( )Name( )

1 次の表の学習項目を学習する場合，どの方法が自分に一番合っていると思いますか。例にならって，一番合っていると思うものに○をつけて下さい。あまり深く考えずに記入して下さい。

学習項目	目で見ること		耳で聞くこと		実際でやること	
(例) ゴルフのスウィングを覚える時	スウィングのビデオを見る	○	コーチの指示を繰り返す		とにかくやってみる	
英語の単語を覚える時	単語に関係する絵を頭に思い浮かべる		声に出して言ってみる		書いて書いて書きまくる	
英語の単語を書く時	単語を頭に思い浮かべてから書く		単語のアルファベットを１つずつ唱えながら書く		とにかくつづりを書いてみる	
ケーキの作り方を学ぶ時	箱に書いてある作り方の絵を見る		作り方や手順を説明したテープを聞く		とにかく作ってみる	
新しいスポーツを学ぶ時	実演（デモンストレーション）を見る		コーチの指示を繰り返す		とにかくやってみる	
歴史上の出来事を学ぶ時	ビデオや絵本で出来事を見る		出来事についてラジオやテープの説明を聞く		ロールプレイや音読りで出来事を表現してみる	
理科で目のはたらきについて学ぶ時	目について描かれた図を見る		医者の話を聞く		目の模型を作る	
忘れたえんえを思い出す時	えんえの絵を頭に思い浮かべる		えんえを声に出して言ってみる		指を使って足し算をしていく	

2 自分はどちらのタイプだと思いますか。あてはまると思うほうに○をつけて下さい。

	タイプA		タイプB	
1	図や表を読むことが苦手である		図や表を読むことが得意である	
2	物語文より説明文の方が，より明確に理解できる		物語文の中から登場人物の感情を読み取ることが得意である	
3	レシピなどにある食材のはかり方など，正しい手順にきちんと従事する		料理全体に興味を示し，ひとつひとつの材料にはあまりこだわらない	
4	結論がはっきりしたものによく反応できる		直感的に反応することが多い。	
5	情報が順序よく提示された時，集中して学習できる		情報が全体として提示された時，集中して学習できる	

2　授業の実際

同時処理優位と継次処理優位に対応するために、学習目標を提示する際に、最終的なGOALと、学習の順序を分けて提示するようにした。

また、説明の際には、毎時間スライド提示をし、視覚情報や聴覚情報の提示順序を考慮し、それぞれの認知スタイルを刺激できるよう配慮した。実際に使用したスライドを以下に示す。

Pra.1　「あなたは、明日、あなたの兄を手伝わなければならない。」
（英訳）

運動覚優位の生徒には、ジェスチャーを多く

Pra.　「君は、今日、釣りに行かなくてはならないのかい。」
（英訳）

取り入れさせたり、ノートをとる時間に、学習内容をイメージ化させたりしている。

映画教材につては、学習内容に合わせて使用し、学習者は、英語リスニングに対して高い興味を示している。「正確に言うことができる英語は聞くことができる。」という基本を伝えることで、リーディングやスピーキングの意欲向上にも徐々につながってきている。

3　今後の研究

授業の中で、どれだけ学習者の認知スタイルに対応できるかが鍵である。学習者の認知スタイルを考慮しながら教材研究をすることは困難も伴うが、校種や教科を超えた次元となり、「わくわくした教材研究」「わくわくした授業づくり」が、小・中・高を通じて可能になると確信している。

教育実践

平成17年度 長期研究員の研究から

学校を変える学校情報化からのアプローチ
～一人一人がかわることができるスクログ（学校用CMS）の活用を通して～

郡山市立明健小学校 教諭 角 田 雅 仁

Ⅰ はじめに

私は長年、小学校で情報教育の担当を務め、世の中の新しい情報技術の発展とともに、情報教育が抱える課題が次々と生まれてくるのを肌で感じ、悩んでいました。そこで、本研究では、様々な情報教育にかかわる課題と向き合い、解決の糸口を導こうと考え実践してきました。

Ⅱ 昨年度の研究から

1 研究の趣旨

学校におけるＩＴの活用は、情報教育の推進、分かる授業の展開、開かれた学校運営の推進など、その教育的な効果が期待されています。しかし、ＩＴを活用する教師としない教師の二極化や学校のホームページの日常的な更新の困難さ等、情報教育には多くの課題があります。そこで、本研究では学校の情報化を切り口として学校の教育活動を改善するために、研究構想に示す見通しを持ち、主題に迫りました。

2 研究内容

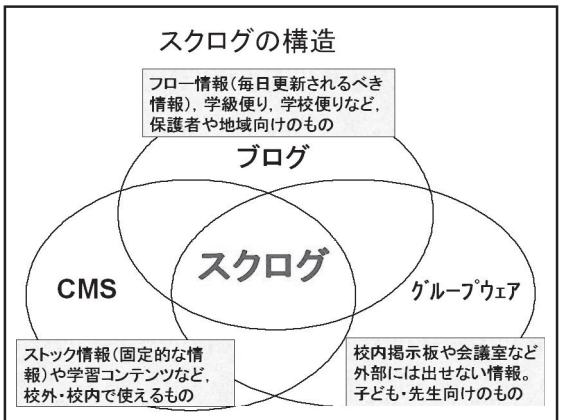
(1) スクログの開発と運用についての理論
(2) 学校情報化を推進する担当者の在り方
(3) スクログの教育的効果

3 研究対象校：郡山市内の小・中学校３校

4 研究の実際

(1) スクログの開発と運用についての理論

(2) 学校情報化を推進する担当者の在り方



ＣＭＳ、ブログ、グループウェアを融合し、学校用にカスタマイズしたのがスクログです。

学校全体への働きかけとして、情報教育について全職員で共通理解が図られるよう、情報教育の全体計画と指導計画を整備しました。さらに、教職員に対して、ＩＴの日常化と活用が図られるよう校内研修会を実施し、「e-活用News」によるＩＴ活用情報を継続的に提供しました。また、授業改善に向け、教職員のＩＴ活用への不安と悩みの解消に取り組みました。

⑶　**学校でのスクログの活用（協力校との共同研究）**

①　**学校情報化への取組み**

学校の実態とニーズを踏まえ、以下のようなスクログの構築を行いました。

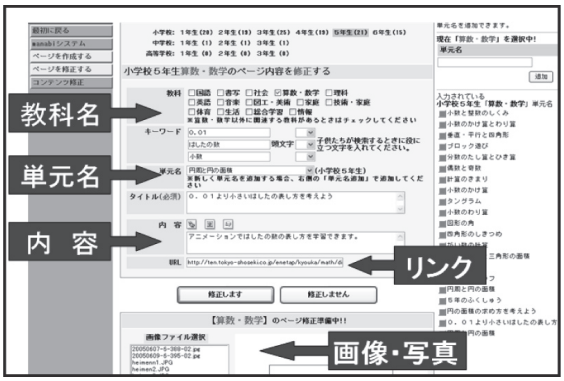
・ブログによる学校 Web 環境づくり
・校務文書共有システムの構築
・学習支援システムの構築

②　**学校 Web 活性化への取組み**

普及率の高い携帯電話からもアクセスしてもらえるよう、家庭にＱＲコードを配付してアクセス拡大の工夫を図りました。また、メールマガジンを配信し、伝えたい情報が確実に伝わるように工夫しました。

③　**授業改善への取組み**

【学習支援システムの入力画面】



ＩＴ活用に不安を持つ教員に対しては、授業構想の相談、機器の準備、授業中の活用を支援し、授業改善の一助としました。また、学習支援システムを構築し、授業で利用したい教育コンテンツの登録や活用が容易にできるようにし、学習環境の改善を図りました。

５　スクログの教育的効果

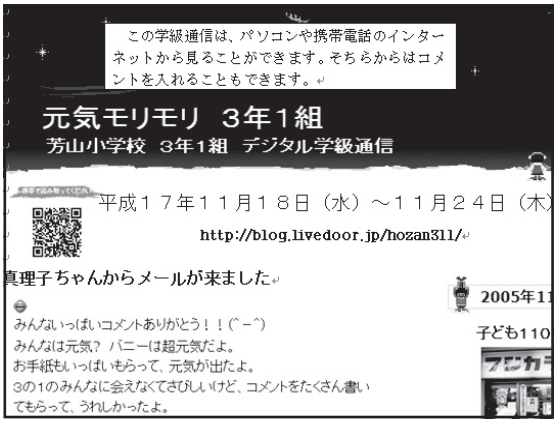
⑴　**学校情報化への効果**

①　学校にブログを導入したことで、教職員のＩＴ活用が促進されたので、ＩＴ活用のスキルが向上してきました。ＩＴ活用への苦手意識がなくなり、主体的にスキルを獲得する姿も見られました。

②　７割以上の教職員が学校 Web にかかわったため、更新するページが増え、Web が活性化しました。

③　ブログの導入により、Web 上での情報発信にとどまらず、学級通信や学級掲示物としての利用、週案等の反省材料としての活用など、多方面の校務に役立ちました。

【記事を印刷し家庭へ配付】



⑵　**学校 Web 活性化への効果**

①　普及している携帯電話にも対応したことで、全家庭の約７割が学校 Web にアクセスしていることが分かりました。

②　携帯電話からのアクセスとリピーターが増加しました。また、学級 Web へのコメントにより学校と子どもと保護者との交流が生まれました。

③　更新の頻度が高くなり、保護者の約７割が「学校の姿が見える。」と感じていることが分かりました。

④　学校 Web を参考にして、転入校を選択する保護者や、他県から学校行事に参加する方も現れました。

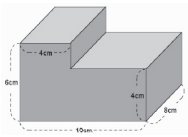
⑶　**授業改善への効果**

ＩＴ活用に不安を持つ教員が、スクログを活用しながらＩＴを授業に取り入れていきました。

①　<u>コミュニケーションのツールとして活用した例</u>

・　国語でのグループ発表、練り上げの後、ブログで「人に優しい街づくり」について情報交換を行い、友達や市民など他者とかかわる力を高めることができました。

②　シミュレーションを個に応じた指導に活用した例



L字型の形でも、切りはなしたり、くっつけたりして計算でもとめられることがわかりました。色々な形で出張っていてもそのやり方でやると求められるんだなと思いました。

・　シミュレーションによる立体図形の分割提示が、児童の自力解決のヒントとなりました。

6　成果と課題

(1)　成　果

①　スクログとＩＴ活用への支援が教職員のＩＴ活用の意欲とスキルの向上につながっていきました。

②　ブログは一人一人がかかわれるため、学校 Web が活性化できました。また、双方向的 Web が保護者の学校理解を深化させる一助となりました。

③　授業に密接に関わるコンテンツと情報化推進リーダーの支援がＩＴの特性を生かした授業の展開を助けました。

(2)　課　題

①　Web の更新時にチェック方法を工夫しました。ブログの特性を考慮した情報の発信・受信を行うには、モラル意識の更なる高揚が不可欠です。

②　トラックバック、コメントスパムなどへの日常的な対策をとる必要があります。

③　ＩＴを活用した実践モデルが学校でまだ十分整っているとは言えません。モデルはＩＴの活用範囲を広めて活用を推進することから、モデルの蓄積と利用拡大に努めていきたいです。

Ⅲ　今年度の研究への取組み

今年度は、平成19年度から小中連携一貫校となる郡山市立明健小学校に赴任し、新たな環境で昨年度の成果と課題を踏まえた研究に取り組んでいます。

1　学校でのスクログの構築と活用

(1)　学校情報化への取組み

①　明健小に合ったスクログの構築

明健小学校のＩＴの実態を調査し、本校の実態に合ったスクログを考案しました。そこでは、校務の情報化と教職員のＩＴのスキルアップを目指すスクログの構築を進めました。

また、課題だったコメントスパムを防ぎ、セキュリティー面を改善したものにしました。

【構築した明健小のスクログ】

②　校内研修会の実施

一人一人がかかわることが大切であるというスクログ導入の趣旨を教職員全員に共通理解が図れるよう校内研修会を実施しました。また、更新時のきまりや個人情報の取り扱いを周知徹底し、発信者のモラルも理解してもらいました。今までホーム

【研修会の様子】

ページの更新に悩んでいた教職員が多かったため、ブログ機能の簡単さがわかり、更新を継続する学年やクラスが確実に増えました。

⑵　学校 Web 活性化への取組み

①「モバイル明健」メールマガジンの構築

保護者に対して子どもたちの登下校時の不審者情報や学校 Web の更新情報をリアルタイムで提供できるよう、「まち comi」と「福島県警Ｓメール」の協力を得て「モバイル明健・メールマガジン」を配信し、学校からの情報が保護者の携帯電話に迅速に伝わるように工夫しました。

送信者	モバイル明健◇
件名	郡山市内で声かけ事案発生
本文	7日(金)午後5時ごろ、郡山市昭和一丁目の路上で、犬の散歩をしていた小学4年女児が、自転車の男から「おいで」と手招きされた。実害無し。男は40～60歳くらい、175～180cmくらい、中肉、丸顔の七三分け、青色の自転車使用。御注意下さい！

【モバイル明健からの不審者情報】

②　家庭への呼びかけ

家庭への連絡文書にＱＲコードを添付し、アクセスがしやすいよう工夫しました。また、家庭教育学級で学校 Web やモバイル明健へのアクセス方法を理解してもらうため、ＩＴ講座として開講し、家庭のＩＴ活用への呼びかけに取組みました。

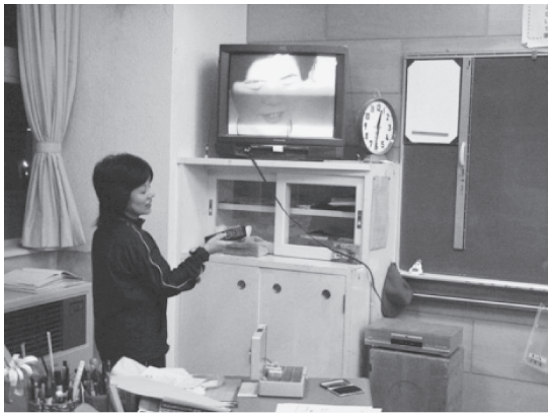
【携帯電話でアクセス】

保護者の声
「普段の学校の様子を知りたいので、携帯電話でアクセスできるのは便利です。学校と家庭をつなぐためにも、もっと学校のことを知らなきゃ、と感じました。学校のホームページにアクセスしたい気持ちになりました。」

⑶　授業改善への取り組み

①　日常的なＩＴ活用のサポート

ＩＴの活用に悩んでいるベテランの教職員に対し支援を進め、負担なく授業でＩＴを扱えるようにサポートしました。



【ＩＴ活用の準備】

②　ＩＴを利用した授業のモデル化

日常の授業でＩＴを活用するイメージがつかみやすいよう、スクログに登録した教育コンテンツを活用した授業を公開しました。ＩＴが手軽で効果的に活用できるモデルとなる場面を見せることが、活用を身近なものとしてとらえてもらうのに効果的でした。

【コンテンツ活用場面】

Ⅳ　おわりに

学校の情報化を切り口として、教職員のＩＴ活用への意識をいかに変えていくかということが、この研究で重要なところです。そのために、サポートする校内の情報化推進リーダーの役割が大切です。スクログが授業改善と家庭との連携に役立つツールとなるよう、今後も研究を継続していきます。

発信

～カリキュラムセンターだより～

研修による指導力の向上に向けて…

◇聴講で自己研修のステップアップを！

センターでは年間百名を超える外部講師をお招きして講座を運営しています。それらの講座に対して、「素晴らしい先生方の講義を講座研修生だけで伺うだけではもったいない。」「自分が受講したい講座を選択して聴講できる機会を増やして、研修の場を広げて欲しい。」との要望がたくさん寄せられています。それらの声にこたえるため、今年度も聴講可能な講座を71講座設けて研修機会の拡充を図ってきました。

先生方の研修意欲の高まりを反映して、8月初めの段階で既に昨年度の聴講申込総数352件を大きく上回る聴講申込みがありました。聴講された先生方からは、講座内容について次のような高い評価の声をたくさんいただいています。

聴講講座感想記録より

講座名：「発達の心理と問題行動」

○　初めて聴講させていただきました。通常の研修生とともに研修（聴講）の機会が得られることはとても有り難いことです。自分で希望する講座を受けることができるのもうれしい限りです。本日の講義で確信が持てたことは、「対策を実施してみる。」ということの重要性でした。自分では手探りでやっている面もあり、とても励みになりました。

講座名：「今、家庭科の教師に求められること」

○　中学校家庭科教員として何を子ども達に伝えていかなければならないのか、今後の指導方法のヒントをたくさんいただきました。食育推進の中、具体的にお話を伺い、これからの授業をどのように進めていくかという悩みが解消されたように思います。今回の講座は高校教員を対象としたものでしたが、中高連携との関わりから中学校の立場でどのように迫っていくべきか考えさせられました。

◇校内研修等での指導主事の活用を！

各校の要請による校内研修への指導主事派遣の件数は月平均15件に上っています。現職教育テーマに沿って、当該教科の指導主事が学校を訪問し、授業での子ども達の姿を通して先生方と研究内容についての話し合いの場を持ったり、各校が抱えている教育課題に沿った話題提供の場を設けたりなど、センターの指導主事派遣事業の活用の範囲が広がってきています。

学校が直面する様々な教育課題を解決するためには、教師の指導力の向上が不可欠となります。センターでは、指導力の向上に向けて先生方の自主研修や各学校の共同研究など個別のニーズに合わせた研修を支援していきます。ご要望やお問い合わせがありましたら、**Tel：024－553－3193（直通）**までお気軽にどうぞ。

お知らせ

平成18年度 福島県教育研究発表大会

今回はここに注目！

その1：開催日は1月26日（金）

例年、２月に開催していましたが、各校の校内行事等との重なりを考慮して、今年度は１月開催とします。

その2：会場は須賀川市文化センター

県内の各地からの参加の便宜を図り、会場を須賀川市文化センター・須賀川アリーナとしました。駐車場の確保についても万全です。

その3：研究発表の充実

研究発表（全体会・分科会）の時間を十分にゆとりをもって確保しました。優れた研究・実践の発表をもとに、確かな学力、豊かな心を育てる「語り合い」の場を広げていきます。

実践に役立つ教育資料

ー最近の研究紀要・資料からー

今回は、センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

「学習意欲の向上を目指した学校教育における『連携』に関する研究」

沖縄県立総合教育センター（2006年３月）

学校教育に関する連携を「家庭・地域の連携」、「校種間の連携」、「職員間・教科間・学科間の連携」という三つの視点からとらえ、連携の具体的な在り方についての研究成果を提示しています。

確かな授業をつくる授業マネジメントの在り方

北九州市立教育センター（2006年３月）

日々の「授業」を的確に振り返り、児童生徒の変容に応じて「授業」を充実・改善していく過程を「授業マネジメント」ととらえ、各教科の目標達成に向けた「確かな授業づくり」を目指して授業実践が行われています。「どの子にも分かる授業をしたい。」「授業力を向上させたい。」等という思いを実現する糸口が示唆されています。

学習内容の習熟の程度に応じた指導の在り方　Ｑ＆Ａ集

福岡県教育委員会・福岡県教育センター（2006年３月）

教職員の習熟度別指導に対する理解を深め、効果的な実施のための指導方法や指導体制等について具体的方策を示すことを目的として研究を進め、Ｑ＆Ａ形式の手引としてまとめたものです。

この手引は、習熟度別指導の実施に直接かかわる担任だけでなく、学力向上プランを実行力のあるプランとして企画・推進していく管理職や主任等にも役立つように、構成と内容が工夫されています。

小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒の指導に関する研究
ーLD、ADHD等の指導法を中心にー

独立行政法人国立特殊教育総合研究所（2006年３月）

通常の学級におけるLD・ADHD・高機能自閉症のある児童生徒に対する指導や支援の内容・方法、教育課程の在り方等について明らかにしています。

※　ここで紹介した以外にも多くの研究紀要や教育資料がありますので、ぜひご活用ください。